

『異邦人』への道 —作家カミュの誕生— (6) *

奈 蔵 正 之

第6部 妄執としてのテーマ(4) —死と転生— (上)

- 6-1. 死への傾斜
- 6-2. 『異邦人』における死への言及
- 6-3. 死の起源
- 6-4. 病いの淵から
- 6-5. 反抗の起源
- 6-6. 自殺の誘惑
- 6-7. 殺人の悪夢
- 6-8. 死刑への執着
- 6-9. 転生の神話
- 6-10. 幸福な死

「フランスの批評家たちが、あなたの作品のうちで見落としてきたのはどのようなものだと思いますか？」

「暗い部分、私の中にある盲目的で本能的なものです」

(1959年12月20日に行われた「最後のインタビュー」より)¹⁾

* 本論文は、『異邦人』の執筆に至るまでのカミュの文学的・内的軌跡を、『幸福な死』の執筆体験を中心にしつつ、伝記的事実を随時参照しながら、できる限り厳密にテキストを分析して解明することを目的としている。論文全体は8部から構成され、これまで第5部までが『人文社会論叢』第2号~第6号において発表されている。本第6部は全体が長大になってしまったため、第5部と同様、上、下に分けて発表することとする。また、第7部以降は以下になる予定である。

第7部 メルソーからムルソーへ

第8部 『異邦人』の成立

1) 原文を引用する。プレイヤッド版「エッセイ篇」(以下単に「エッセイ篇」あるいはPl. IIと略記)、1977年版、p.1925。

— Que croyez-vous que les critiques français aient négligé dans votre œuvre?

— La part obscure, ce qu'il y a d'aveugle et d'instinctif en moi.

6-1. 死への傾斜

カミュの傑作『異邦人』は、あまりにも有名なこの一節で開始される。

今日、母親が死んだ。昨日のことなのかもしれないが、わからない。施設から電報を受け取った。「ハハウエシス。マイソウアス。チョウイヲヒョウス」これではなんのことかわからない。きっと昨日のことなのだろう。(p.1127)²⁾

一つの死が、小説の幕を開ける。その死は、第1部第1章以降は、悔やみを言われるシーンなどを通じて時折話題とされることを除いては、第1部を通じてテーマとして扱われることはなく、メルソー自身の生活も、この死から大きな影響を受けることはない。だが、第一部の最終場面で、さまざまな偶然の連鎖と、北アフリカの苛烈な「太陽のせい」でメルソーは殺人を犯し、「全てが始まる」。こうして、第二の死が小説の中心に置かれ、小説の転換点を形成しているのである。第二部の1年にわたる予審と重罪裁判所での裁判を通じて、ごくありきたりの日常的な死であった第一の死は、第二の死をひきおこしたメルソーを裁くためにさまざまに強引な解釈を施され、第三の死、つまり小説が終了してから執行されることになる主人公の死刑判決を導く、大きな原因とされてしまう。

B. T. フィッチ Fitch が早くから指摘しているように、「死」は、『異邦人』のテーマであると同時に、その構成そのものを支えている³⁾。一方で生の光と人間の価値に執着し、第二次大戦から戦後の冷戦下、そしてアルジェリア動乱の時代を通じて、一貫して「生の擁護者」として発言し続けたカミュが、その作家としてのデビュー作の骨組みを死のテーマで作り上げていたのは、さかのぼって考えればむしろ意外な事実であろう。

しかしながら、カミュの創作テキストにおける死の重要性は、決して『異邦人』一作のみに特徴的な事柄ではなかった。生前未発表に終わったとはいえ事実上の処女小説である『幸福な死』は、殺人のエピソードの導入によって初めて構想が形を取り、小説はメルソーによるザグルー殺害で幕を開け、メルソー自身の「幸福な死」によって終わりを遂げる。集団的な不幸に対する人間の連帯を謳い上げたかに見える『ペスト』の作中には、疫病による死体が累々と横たわっており、ペストの最初の犠牲者であるアパルトマンの管理人の死により実質的な幕開けを行った小説は、事実上の最後の犠牲者であるタルーの死により、実質的に幕を閉じる。『転落』には目に見える形での死は姿を表わさないが、露悪的な冗舌を繰り返すクラマンズが有能な弁護士から「判事にして改悛者」に転落していくきっかけとなったのは、セーヌ川に身投げした若い女性の叫び声であった。「真に重大な哲学上の問題は一つしかない、自殺である」という名文句で始まる『シーシュポスの神話』は、

2) 以下、『異邦人』からの引用は、プレイヤッド版「戯曲・小説篇」（以下、単に「戯曲・小説篇」あるいはPI. Iと略記）1974年版による。

3) Fitch, « *L'Éranger* » de Camus, Larrousse, 1972. 特にpp.134-35.

論理的考察を通じて自殺を斥けることが議論の中心であり、『反抗する人間』では、人類の進歩の名の元に行われる政治的な集団殺人の告発にページが費やされた。そして演劇の世界に目を向けるならば、暴虐の果てにみずから「高次の自殺」を遂げるカリギュラ、正体を明かさなかったがゆえに母親と妹によって殺害される『誤解』のジャン、カディスの町を救うために進んでベストの刃に倒れる『戒厳令』のディエゴ、セルゲイ大公を暗殺した後テロリストとしての倫理を掲げて絞首刑に処せられる『正義の人々』のカリヤーエフと、主人公たちは、ことごとく観客の前で死の運命を遂げる。特に愛人にして妹ドリュジラの死によって幕を開け、カリギュラの死とともに幕を下ろす戯曲『カリギュラ』は、執筆時期が近いこともあり、死そのものを作品構成の骨格としている点に、小説『幸福な死』および『異邦人』の構成との類縁性が認められるだろう

むろん、文学作品のテーマというものは、突き詰めて言えば、愛と死に帰着するのであり、宗教が人類の歴史を通じてこの二つを司ってきたのと同じく、文学もまた言語表現という神殿において、愛と死を巡る祭祀のバリエーションを延々と繰り返してきた。いかなる作家も、およそ人間を描こうとするのであれば、この二つのテーマから逃れることはできまい。したがって、カミュにおける愛の問題がある意味で月並みな研究テーマであるのと同様、死の問題もまた、平凡なテーマであるかもしれない。しかしながら、上述のようにカミュの全作品を通じて、死のイメージがいかに濃厚であり、いかに作品の骨格そのものを支えているかを考えると、「ありきたり」の一言で括ることはとてもできないのである。

また、二度の悲惨な世界大戦を体験した20世紀前半において、死が作品の支配的テーマとなったフランス作家はカミュだけとは言えず、マルローやセリーヌの名前がすぐに浮かぶ。だが、死に対する英雄的な観念を掲げたマルローや、退廃的とも言える死の美学に耽溺したセリーヌとは異なり、カミュにとって「死」はフィクションの世界の事柄である以前に、皮膚感覚に近い日々のイメージであり、この後述べるように作品だけではなく「ノート」の記述の中に死のテーマがあふれていること一つをとっても、その点が明確になる。さらにカミュ作品における死のテーマの独自性は、死の暗さに沈み込んだり死を飾り立てたりするのではなく、生の喜びの称揚と隣り合わせに死が提示されていることである。死の深遠が深ければ深いほど、生への欲求は高まり、生の喜びを歌い上げようとすればするほど、死の可能性が首をもたげる。それは死と生の弁証法ではなく、死と生が、その両極端という性格そのまま、同時に姿を表すというテキスト世界なのである。北アフリカの強烈な太陽に照らされて、影の輪郭がそれだけ明確なものとなるように、死と生が、妥協なく、くつきりとお互いを切り取りあうのだ。そして作品を離れた一人の人間としてあるいはジャーナリストとしては、カミュは生涯を通じて「生の擁護者」としての発言と行動を繰り返したのであった。

カミュ・テキストの世界で死のイメージがいかに遍在しているかを示すために、ここでもデジタル・データによる検討を行いたい。本論文第5部において「bonheur」、「heureux」について検索を行ったのと同じコーパス、同じ手法によって、単語「mort」について検索を行うことにするが、語形「mort」には「死」という概念を表わす女性名詞「la mort」、「死者」という意味で、男性形と女性形

がある「le mort, un mort, une morte」、および過去分詞「mort」があり、語形だけで検索しても有意のデータは得られない。また、過去分詞「mort」だけを独立させることはできず、これを検索するならば、動詞「mourir」の不定法及び全活用形を調べなければ、統計の結果として偏ってしまう。そこで、カミュの主要テキストを通じて千数百例に及ぶ語形「mort」に関してそれぞれ検討し、①「死」、②「死者」、③過去分詞のそれぞれに分類したうえで、数百例に及ぶ動詞「mourir」の不定法及び全活用形の検索結果を加えて作成したのが〔表6-1〕である（③においては、形容詞的に名詞を直接形容している過去分詞「mort」は別にまとめた）。さらに、「la mort」（死）においても、主に限定詞を伴って実体的な「死」の意味で用いられる場合と、「condamné à mort」のように前置詞のあとに無冠詞で使用され、「死」という実体的な観念ではなく複合語や熟語の一部として用いられる場合とを分ける必要があると考えられるので、その分類も行ってある。

しかしながら、「死ぬ」存在は人間に限らず、他の生き物も死ぬ運命にある。とりわけ小説『ペスト』においては、人間に『ペスト』が蔓延する前駆的状况として大量のネズミが死に、必然的に《des rats morts》といった表現が多用されている。またより重要なのは、人と物を語彙レベルでほとんど区別しないフランス語では、人間ではなく物体に関して「mourir, mort」と言った場合、機械であれば「壊れた」、物であれば「動かない」という意味になるのであり、例えば「La télé est morte」であれば「テレビが壊れた」、《les feuilles mortes》ならば「枯葉」、《la nature morte》であれば絵画のモチーフとしての「静物」となってしまう。このような意味で「mourir, mort」を使うことは、「死」のイメージにこだわり続けたカミュにおいては数少ないのであるが、やはりそれらは今回のカウントに含めるべきではない。以上のような複雑な操作を経て得られたのが、〔表6-1〕なのである⁴⁾。

4) 筆者はプレイヤッド版や「カイエ・アルベール・カミュ」シリーズに収められたカミュの主要テキストをすべてOCRによりデジタル・データ化し、研究に活用している。表中の「行数」は、それぞれのテキストをデジタルデータに読み込んだものを、Times, 14ポイントでA4版のフォーマットにペーストしたファイルにおいてカウントしたものであり、ほぼ単語数の総量に比例する。「出現率」は、1行ごとにその単語／語形が何回現われるかというパーセンテージに、比較しやすい数字になるように10を乗じたもので、結果として、1000行ごとに何回その単語／語形が出現するかという数値になる。詳しくは、『異邦人』への道(4) 一妄執としてのテーマ3 幸福の探求一上』の注4を参照。弘前大学『人文社会論叢』第5号、p.50。

【表6-1】

ジャンル	作品	行数	①la mort (死)						②le mort (死者)						③mourir (死ぬ)					
			実体的		修飾的		①の合計		過去分詞 形容詞的用法		活用形		不定詞		③の合計		①～③総計			
			出現数	出現率	出現数	出現率	出現数	出現率	出現数	出現率	出現数	出現率	出現数	出現率	出現数	出現率	出現数	出現率		
小説	『幸福な死』	2439	22	0.02	1	0.41	23	0.43	4	1.64	2	0.82	8	3.28	8	3.28	18	7.38	45	18.45
	『異邦人』	1986	14	7.05	4	2.01	18	9.06	3	1.51	1	0.50	17	8.36	2	1.01	26	10.07	41	20.64
	『ペスト』	5553	38	6.84	6	1.08	44	7.92	45	8.10	26	4.68	40	7.20	39	7.02	105	18.91	194	34.94
	『転落』	1996	18	9.02	0	0.00	18	9.02	5	2.51	0	0.00	15	7.32	15	7.52	30	15.03	53	26.55
	『追放と王国』	2885	5	1.73	0	0.00	5	1.73	0	0.00	0	0.00	8	2.77	11	3.81	19	6.59	24	8.32
	『最初の間』	4712	25	5.31	4	0.85	29	6.15	9	1.91	9	1.91	37	7.85	11	2.33	57	12.10	95	20.16
	『カリギユラ』	891	14	15.71	1	1.12	15	16.84	8	8.98	1	1.12	11	12.35	19	21.32	31	34.79	54	60.61
	『誤解』	745	4	5.37	4	5.37	8	10.74	1	1.34	1	1.34	9	12.08	12	16.11	22	29.53	31	41.61
	『戒厳令』	1200	21	17.50	3	2.50	24	20.00	11	9.17	0	0.00	23	19.17	19	15.83	42	35.00	77	64.17
	『正義の人々』	790	21	26.58	1	1.27	22	27.85	0	0.00	1	1.27	19	24.05	28	35.44	48	60.76	70	88.61
エッセイ	『墓と表』	818	11	13.45	0	0.00	11	13.45	3	3.67	1	1.22	15	18.34	14	17.11	30	36.67	44	53.79
	『婚札』	814	25	30.71	0	0.00	26	31.94	5	6.14	4	4.91	6	7.37	11	13.51	21	25.80	52	63.88
	『夏』	1341	3	2.24	1	0.75	4	2.98	0	0.00	3	2.24	10	7.46	11	8.20	24	17.90	28	20.88
	『シーシュポスの神話』	2477	55	22.20	5	2.02	60	24.22	2	0.81	0	0.00	14	5.65	22	8.88	36	14.53	98	39.56
	『反抗する人間』	7196	169	23.49	21	2.92	190	26.40	1	0.14	5	0.69	66	9.17	62	8.62	133	18.48	324	45.03
	『ドイツ人の友への手紙』	492	2	4.07	0	0.00	2	4.07	1	2.03	2	4.07	2	4.07	9	18.29	13	26.42	16	32.52
	『ギロチンに関する考察』	1138	40	35.15	76	66.78	116	101.93	3	2.64	1	0.88	9	7.91	15	13.18	25	21.97	144	126.54
	『時事評論集』1, 2, 3	7381	34	4.61	14	1.90	48	6.50	11	1.49	9	1.22	40	5.42	21	2.85	70	9.48	129	17.48
	『ノート1』	2485	71	28.57	8	3.22	79	31.79	12	4.83	5	2.01	34	13.68	22	8.85	61	24.55	152	61.17
	『ノート2』 + 『旅日記』	5456	95	17.41	58	10.63	153	28.04	13	2.38	7	1.28	58	10.63	50	9.16	115	21.08	281	51.50
資料類	『ノート3』	3535	69	19.52	10	2.83	79	22.35	7	1.98	6	1.70	54	15.38	43	12.16	103	29.14	189	53.47
	『初期作品集』	2160	30	13.89	1	0.46	31	14.35	0	0.00	1	0.46	27	12.50	12	5.56	40	18.52	71	32.87
	『キリスト教形而上学』	2071	24	11.59	2	0.97	26	12.55	1	0.48	2	0.97	8	3.86	3	1.45	13	6.28	40	19.31
	合計・平均	60561	810	13.37	220	3.63	1031	17.02	145	2.39	86	1.42	537	8.87	459	7.58	1082	17.87	2207	36.44

このように、カミュのほぼ全テキストを通じて、「死、死者、死ぬ」という、死の概念やイメージに直結する単語／語形は総計で2207回、つまりデジタル・データにして1000行あたり36.4回という極めて高い頻度で出現していることがわかる。出現率が飛び抜けているのは政治的エッセイ『ギロチンに関する考察』であるが、これはこの作品のテーマから言って当然のことであろう。エッセイにおいては、政治的殺人を告発した『反抗する人間』も高い出現率を示しており(45.03)⁵⁾、カミュにおける「反抗」のイメージの、その反抗を行う究極の対象が「死」であったことを示唆している⁶⁾。その一方、本論文第5部で検討した『婚礼』が、『裏と表』とは逆にポジティブな世界が描かれている」という通俗的な批評にも関わらず高い出現率を示しており(66.88)、第5部で指摘したような、このエッセイ集の複雑な性格を物語っている⁷⁾。また、ジャンル別に考えると、『正義の人々』を初めとして(88.61)、4篇の戯曲がどれも高い出現率を示しており、戯曲のテキストがせりふだけで構成されていることを考えると⁸⁾、登場人物が「死、死者、死ぬ」という単語／語形をどれほど頻繁に口にしているか、「死のテーマ」がどれほどカミュの演劇世界において中心的な地位を示しているかが、かいま見える。

さらに、テキスト全体を通して均質的に高い数値を示しているジャンルが、「資料類」における「ノート」であり、1935年から1959年という長期間にわたって綴られたのにもかかわらず、50~60という高い出現率を一貫して保っている点が印象的である。カミュの「ノート」は、極めて複雑な性格を持った資料であり、日記、旅日記、省察録、創作メモ・ノートのどの要素も含まれていて、時期やカミュの精神状況によって、そのうちのいずれかの要素が強まった⁹⁾。しかし、全体に共通している性格が、「ノート」が極めて内省的色彩が強いものであり、「ノート」に何かを記すという行為自体が、カミュにとって、自らの内的世界に沈潜するための儀式的な意味合いを持っていたと思われるという点である¹⁰⁾。したがって、「ノート」を通してこのように死に関する単語／語形が高い頻度で出現していることは、そのまま、カミュ的世界における「死のイメージ」の重要性を裏書きしているのではないだろうか。

小説ジャンルに目を向けると、作品の内容から言って当然『ペスト』が最高値を示しているが

5) 『反抗する人間』におけるキーワード«meurtre»にも「死のイメージ」が結びついているが、[表6-1]と同じコーパスで検索するとカミュのほぼ全テキストを通じて«meurtre»229例のうち半数以上の115例が『反抗する人間』に集中している(さらに、「反抗と殺人」と言った章題でも3例ある)。

6) この点については、後に第5節で詳しく見る。

7) 『異邦人』への道(5)―妄執としてのテーマ3 幸福の探求―『人文社会論叢』第6号、pp.35-42を参照。

8) 『異邦人』への道(4)の注4で述べたように、戯曲のテキスト・データにはト書きは含めていない。

9) 例えば、1937年8月~12月の『幸福な死』の構想時点ではほぼ創作ノートという性格を持っていたのに対し、1955年のギリシア旅行の際には完全な旅日記になっている。

10) とりわけ、初期の「ノート」ではこの傾向が強く、「ノート」の第1分冊から第6分冊(刊行された『ノート1』、『ノート2』)までその傾向が引き続く。「ノート」第7分冊以降(刊行された『ノート3』)になると、やや性格が異なりだし、日記に等しい記載や、内的な考察を加えない直接的な文章なども目立つようになる。

(34.94), 晩年の『追放と王国』において「死」に関する語彙が激減しており(8.32), コーパス全体を通じて最低である点が印象的である。創作力の低下に苦しんだ50年代, 「死」について深く考えることがもはやカミュにとっては重荷になっていたのであろうか。『異邦人』に関して検討すると, 名詞 «mort» 「死」においても, «mort» 「死者」においても, また動詞 «mourir» とその活用形においても, 突出した使用数を示してはいない。むしろ, コーパス全体の平均から比べるとかなり下回っており, 小説テキストに限るとほぼ平均的な数値に落ち着いている。「死」がテーマや構成において占めている重要性と比べて, 「死」に関する語彙自体は, 『異邦人』においてはむしろ抑制された形で使用されているのである。これは, 本論文第5部で分析した «bonheur» や «heureux» の用例とも共通する傾向であって, 『異邦人』がいかに抑制された表現で貫かれているか, という点を証明する具体的な証拠だと言えるであろう。また, 『幸福な死』においても, «bonheur», «heureux» の出現率が高いことと比べると¹¹⁾, «mort, mourir» の出現率はかなり低いと言える。

本第6部においては, まず, カミュの作品別頻度から言うと決して多いとはいえない, 『異邦人』におけるこの38の「死」に関する用例を具体的に分析して, 『異邦人』と死のテーマを考えるうえでの第一歩としたい。次いで, カミュにおいて死のテーマがかくも重要となった理由を, その生い立ち, 発病体験, 死に対する恐怖のトラウマ, などの観点から分析し, それらがテキストにどのように反映しているかを検討し, また, 死に対する抵抗がカミュにおける「反抗」の思想の原点となっていることを示したい。

死のテーマはさらに, カミュにおける自殺の誘惑, 殺人の妄執, 死刑のテーマへと展開していく。以上のような考察に基づいて, 最初の小説『幸福な死』を, 今度は「幸福」ではなく「死」の角度から分析し, 死の妄執に一つの解決を見出そうと試みた若きカミュが「転生」というテーマにたどり着いたことを明らかにしたい。

6-2. 『異邦人』における死への言及

『異邦人』における «mourir, mort» の用例を各部各章ごとに詳細に分析するために, 便宜上A～Dの4種類に分け, それぞれについて, 出現した順序ごとに1～の数字をふることにする。Aは抽象概念としての名詞「死」であり, Bは死刑囚 «condamné à mort» という熟語表現である。Cは具体名詞としての「死者」であり, Bは動詞 «mourir» とその活用形である(形容詞的に用いられた «mort» も含む)。

このようにして『異邦人』における用例をまとめたのが[表6-2]である¹²⁾。以下, 用例を含むパッセージを原文で示し, 訳文は煩瑣になるので省き, 用例に関する注釈をもって換えることとする。

11) «bonheur», «heureux»の出現率については, 『異邦人』への道(5) —妄執としてのテーマ3 幸福の探求—下』『人文社会論叢』第6号, pp.21-23を参照。

【表 6 - 2】

部	章	A. la mort	B. condamné a mort	C. le mort	D. mourir	合計
I	1	0	0	2	3	5
	2	0	0	0	1	1
	3	2	0	0	0	2
	4	0	0	0	0	0
	5	1	0	0	2	3
	6	0	0	0	0	0
II	1	1	0	0	2	3
	2	0	0	0	0	0
	3	3	0	0	0	3
	4	2	0	0	0	2
	5	5	4	1	9	19
合計		14	4	3	17	38

第一部第1章

D-1 Aujourd'hui, maman est **morte**. Ou peut-être hier, je ne sais pas. J'ai reçu un télégramme de l'asile [...] (1127)

D-2 Pour le moment, c'est un peu comme si maman n'était pas morte. Après l'enterrement, au contraire, ce sera une affaire classée et tout aura revêtu une allure plus officielle. (1127)

D-3 « Nous l'avons transportée dans notre petite morgue. Pour ne pas impressionner les autres. Chaque fois qu'un pensionnaire **meurt**, les autres sont nerveux pendant deux ou trois jours. Et ça rend le service difficile. » (1128)

C-1 C'est alors qu'il [le concierge] m'avait appris qu'il avait vécu à Paris et qu'il avait du mal à l'oublier. À Paris, on reste avec **le mort** trois, quatre jours quelquefois. Ici on n'a pas le temps, on ne s'est pas fait à l'idée que déjà il faut courir derrière le corbillard. (1130)

C-2 Ils [les vieillards de l'asile] ne s'en apercevaient pas tant ils étaient absorbés dans leurs pensées. J'avais même l'impression que cette **morte**, couchée au milieu d'eux, ne signifiait rien à leurs yeux. Mais je crois maintenant que c'était une impression fausse. (1132)

A-1 À l'asile on les plaisantait, on disait à Pérez : « C'est votre « fiancée. » Lui riait. Ça leur fai-

12) 語形としてのmortはあと1ヶ所、「枯れ木」という意味で使用されているが、この用例に「死」のイメージを求められないことは言うまでもない。

J'ai vu un groupe d'Arabes adossés à la devanture du bureau de tabac. Ils nous regardaient en silence, mais à leur manière, ni plus ni moins que si nous étions des pierres ou *des arbres morts*. (p.1161)

sait plaisir. Et le fait est que **la mort** de Mme Meursault l'a beaucoup affecté. Je n'ai pas cru devoir lui refuser l'autorisation. Mais sur le conseil du médecin visiteur, je lui ai interdit la veillée d'hier. » (1134)

第一部第1章は、施設で死んだ母親の埋葬のためにムルソーがマランゴを訪れる場面だけに、「死」に対する言及は数多くなっている。D-1は先にも引いた小説冒頭の一句であるが、これは1939年後半に「ノート」に記された断章を時制だけ変えて利用したものであり¹³⁾、この点については本論文第8部で詳しく検討する。D-2は、2日の休暇を申し出たムルソーに対して事務所の社長がいい顔をしなかったことに対するムルソーの心理的な反応であり、「これではまるで母親が死んでいないのと同じだ」という印象を抱いている。D-3は、施設に収容されている老人が亡くなった場合の一般的な対応を、施設の院長が述べたもので、他の老人たちを刺激しないように霊安室に遺体を安置することになっていた。C-1は、施設の用務員が、むかしパリに住んでいた頃の思い出を問わず語り語っているもので、パリであるならば埋葬まで遺体を2～3日安置していても大丈夫だが、アルジェリアではすぐ埋葬しなくてはならないと述べ、「そんなことを話すもんじゃないでしょ」と、用務員はその妻から叱責を受ける。死者一般を指しているので、**le mort**と定冠詞付きの男性形で示されている。C-1は、安置室での通夜に、ムルソーとともに施設の老人たちが立ち会っている情景で、「この死者 **cette morte**」とは、ムルソーの母親を指しており、『異邦人』全体の中で「母親」が実体的な物理的存在として指し示される唯一のシーンである。仲間の老人たちは、それぞれ自分たちの中に閉じこもり、ムルソーの母親の遺骸に何の関心も抱いていないかのように、ムルソーにはその時思えた。「今ではこの印象は間違っていたと思う」の「**je crois maintenant**」というのがいつの時点を目指すのか、それが第一部第1章の「語り時点」になるわけであるが、特定は難しい。A-1は、ムルソーの母親と施設で親しくしていて、仲間の老人たちから「婚約者だ」とからかわれていてトマ・ペレスという老人が、ムルソーの母親の死により大変なショックを受けていること、生前の親交にかんがみて、ペレスが埋葬に立ち会うことに許可を与えたことを、施設の院長が語る場面である。このように第一部第1章では、「死」にまつわる表現は、C-1を除いては一般的な考察ではなく、具体的な「母親の死」を巡って用いられているのである。

第一部第2章

D-4 Quand nous nous sommes rhabillés, elle a eu l'air très surprise de me voir avec une cravate noire et elle m'a demandé si j'étais en deuil. Je lui ai dit que maman était **morte**. Comme elle voulait savoir depuis quand, j'ai répondu: «Depuis hier. » Elle a eu un petit recul, mais n'a fait aucune remarque. (1139)

13) 『ノート1-2』断章107 (Carnets I, p.129)。

埋葬の日の翌日、海に泳ぎに行ったムルソーは、以前同僚だったタイピスト、マリー・カルドナと出会い、楽しい1日を過ごす。海から上がって着替えたムルソーが黒ネクタイを締めているのを見てマリーが驚き、「喪中」なの、と尋ねたのに対して、「母親が昨日死んだ」と教えた場面である。マリーが少したじろいだので、この後、ムルソーは「しかたのないことだ」といいわけをしようと思ったが、口にするのはやめる。そして「誰もがたいてい少しはミスを犯しているのだ」と心の内で考える。B.T.Fitchを初め多くの批評家がこのシーンを取り上げて、「母親を施設に預けて死なせてしまったことに対してムルソーは漠然とした<罪の意識>を感じていたのではないか」という議論を行っている。それは一般論として、ムルソー以外の誰が同じ立場に置かれたとしても少しは感じる当然の感情であるし、一方で、母親を施設に預けたこと自体については、ムルソーはやむを得なかったと考え、ことさらネガティブには考えていない。こうしたシーンを針小棒大にとりあげて深読みを行おうとする傾向には筆者は異を唱えたい。この場面はむしろ、「人前で嘘をつかず、心に思ったこと以上のことは口にしない」という、カミュがムルソーに付与しようとした根本的パーソナリティが的確に描かれているシーンとして捉えるべきであろう。これから口説こうというマリーに対してさえ、ムルソーは「格好をつける」ことはせずに包み隠さず事実を語っているのである。

第一部第3章

A-2 J'ai dû avoir l'air fatigué parce que Raymond m'a dit qu'il ne fallait pas se laisser aller. D'abord, je n'ai pas compris. Il m'a expliqué alors qu'il avait appris **la mort** de maman mais que c'était une chose qui devait arriver un jour ou l'autre. C'était aussi mon avis. (1148)

第一部第4章

A-3 Pour dire quelque chose, je l'ai interrogé sur son chien. Il [Salamano] m'a dit qu'il l'avait eu après **la mort** de sa femme. (1158)

D-5 Il n'avait pas été heureux avec sa femme, mais dans l'ensemble il s'était bien habitué à elle. Quand elle était **morte**, il s'était senti très seul. Alors, il avait demandé un chien à un camarade d'atelier et il avait eu celui-là très jeune. (1158)

D-6 Il m'a dit que maman aimait beaucoup son chien. En parlant d'elle, il l'appelait « votre pauvre mère ». Il a émis la supposition que je devais être bien malheureux depuis que maman était **morte** et je n'ai rien répondu.

第1章の冒頭で、レストランの店主セレストがムルソーの母親の死を知って、常連客とともに悔やみを言ったのに続いて、第1部では、同じアパルトマンのレモン・サンテスとサラマノ老人が、ムルソーに悔やみを述べている (A-2とD-5)。サンテスもサラマノも、母親の死によってムルソーがショックをうけ、投げやりな気持ちになったり暗い気持ちになったりしているのではないかと推測するが (D-6)、知り合いの家族が死んだと聞いたなら、このように考えて悔やみを言うのはごく自

然の反応であり、取り立てて深い意味はない。このような、言わば紋切り型の悔やみの文句に対して、ムルソーはウイともノンとも答えない。これがムルソーならではの独特な対応の仕方であり、ウイと言えば、実際には母親の死からそれほどショックは受けていないのだから嘘になってしまうし、だからといってノンと答えたら、サンテスやサラmanoの心証を害する結果になってしまう。自分に対して誠実であると同時に他人を傷つけまいとする結果、ムルソーはおのずと寡黙になってゆくのである。そうした言いわけが、一人称体であるにもかかわらずムルソーの心内語として一切語られないために、主人公はなぞめいた存在という印象を与え、読者や批評家によって多様な解釈が施されるわけであるが、作品の内容に則してできるだけ素直に理解すれば、ムルソーのコミュニケーションの在り方は独特とはいえ、ことさら「異様」とは言い難い。A-3とD-5は、サラmanoの妻に関するものであり、『異邦人』の内容に深くは関わらない。

なお、浜辺でのアラブ人殺害という事件が起こる第1部第6章で、「meurtre», «tuer» などはおろか、「mourir, mort」に関わる単語／語形が（注12で述べた「枯れ木」という表現を除いては）1ヶ所も現われないのは印象的である。第2部における検事の論告がどのようなものであれ、この事件は所詮「太陽のせいでおこった」偶発的な殺人でしかなく、その点を描き出すためにカミュが慎重な配慮を行って使用する語彙を選んでいたことが理解される。ただ1ヶ所、第6章の冒頭で、おそらくは寝不足からムルソーの顔色が悪いのを、マリーが「まるでお葬式の時みたいな顔をしている」（フランス語では「une tête d'enterrement」で、直訳すれば「埋葬の時の顔」とからかうシーンがあるが¹⁴⁾、この表現に象徴的な意味を見出そうという批評家もいる。

第二部第1章

D-7 On avait su que ma mère était **morte** récemment à l'asile. On avait alors fait une enquête à Marengo. Les instructeurs avaient appris que « j'avais fait preuve d'insensibilité » le jour de l'enterrement de maman. (1172)

A-4 Sans doute, j'aimais bien maman, mais cela ne voulait rien dire. Tous les êtres sains avaient plus ou moins souhaité **la mort** de ceux qu'ils aimaient. Ici, l'avocat m'a coupé et a paru très agité. Il m'a fait promettre de ne pas dire cela à l'audience, ni chez le magistrat instructeur. (1172)

D-8 Ce que je pouvais dire à coup sûr, c'est que j'aurais préféré que maman ne **mourût** pas. Mais mon avocat n'avait pas l'air content. Il m'a dit : « Ceci n'est pas assez. » (1172)

第一部におけるムルソーの母親の死は、人間であれば死は避けがたいという意味で、ありふれたできごとであった。それが、第二部において殺人犯としてムルソーが社会から制裁を受けるに際し

14) その朝ムルソーはなかなか起きられずマリーがマリーが揺り起こさなければならなかったとあることから、ムルソーは寝不足で顔色が悪かったのであり、その寝不足は、前の晩にマリーとベッドを共にしたためであろう。

て、まったく異なった意味を帯び、彼の運命を大きく変えていくのである。まず、予審段階のムルソーに接見した弁護士が、埋葬の日のムルソーが「あまり心を動かされたようには見えなかった」という証言を重視して、これが陪審の心証を悪くするおそれがあると判断し、「悲しみという自然な感情をこらえて無感動なふうを装ったのではないか (A-4)」と問いたすが、「葬儀に際してはことさら悲しみを装うべきだ」という社会的コードに無縁な主人公は、弁護士の意図そのものがよく理解できない。「まともな人間ならだれしも、愛する者の死を願ったことが一度や二度はあるはずだ」というムルソーのせりふの真意はわかりにくい、彼の反応パターンから考えて、「人間関係が重く感じられるときに、それから自由になりたいと思うこともあるだろう」という程度の意味であろう。ムルソーは、自分は体調が精神面に響きやすいたちで、通夜の寝不足のために埋葬の日はぼおとしていたと弁護士に述べ、「自分に言えるのは母親が死なないほうがよかったということだ (D-8)」と語るが、相手にされない。

第二部第3章

A-5 Le procureur qui feuilletait un dossier lui a demandé brusquement de quand datait notre liaison. Elle [Marie] a indiqué la date. Le procureur a remarqué d'un air indifférent qu'il lui semblait que c'était le lendemain de **la mort** de maman. (1192-93)

A-6 Le procureur s'est alors levé, très grave et d'une voix que j'ai trouvée vraiment émue, le doigt tendu vers moi, il a articulé lentement : « Messieurs les jurés, le lendemain de **la mort** de sa mère, cet homme prenait des bains, commençait une liaison irrégulière, et allait rire devant un film comique. Je n'ai rien de plus à vous dire. » (1192)

A-7 Le procureur s'est alors retourné vers le jury et a déclaré : « Le même homme qui au lendemain de **la mort** de sa mère se livrait à la débauche la plus honteuse a tué pour des raisons futiles et pour liquider une affaire « de mœurs inqualifiable. » (1195-6)

「母親の死」は、重罪裁判の法廷において、検事によって最大限に利用される。とりわけ死の翌日にマリーと出会い一夜を共にしたことが、モラルを欠いた行動であり、殺人そのものが問題であるよりも、モラルを欠いた人間として殺人を犯したからこそ、ムルソーは裁かれなければならないという異様な論理が組み立てられる。肉親の死に際しては喪に服し、行いを慎むというのは通常の社会的コードであろうが、ムルソーはこうした社会的コードに対してこそ「«étranger»=無縁な人間」なのであった。むろん、いかなる規範も無視する反社会的人格の持ち主というのではなく、自らの価値観や感性に合致しない事柄を単に社会的コードだからであるという理由で無批判に受け入れることを忌避してきたのである¹⁵⁾。母親の埋葬の翌日にマリーを抱いたとしても、棺桶の前にしてコーヒーを飲み煙草を吸ったのと同様、それがことさら死者に対する冒瀆になるとはムルソーは考えない。だが、陪審員の「心証」が、法律的議論よりも、まさにこの社会的コードに抵触するかどうかで大きく左右されることを熟知している検事は、ムルソーと「関係を持った」のが彼の母親の

死の翌日であったという証言をマリーから引き出し (A-5), そのように社会的モラルに欠けた人間だからこそ, 女衞レモンとその情婦の兄弟とのあいだのごたごたにけりをつけるために殺人を犯したのだと力説するのである (A-6, 7)。

第二部第4章

A-8 Il a résumé les faits à partir de **la mort** de maman. Il a rappelé mon insensibilité, l'ignorance où j'étais de l'âge de maman, mon bain du lendemain, avec une femme, le cinéma, Fernandel et enfin la rentrée avec Marie.

A-9 C'est à peine si j'ai entendu mon avocat s'écrier, pour finir, que les jurés ne voudraient pas envoyer à **la mort** un travailleur honnête perdu par une minute d'égarement, et demander les circonstances atténuantes pour un crime dont je traînais déjà, comme le plus sûr de mes châtements, le remords éternel. (1199-1200)

第二部第4章における最終論告のシーンでも, ムルソーの母親の死を利用する検事の論告の趣旨は変わらない。これに対する弁護士の最終弁論 (A-9) で初めて, 仮想的なものではあるが, 「被告の死」に言及される。ほんの一瞬我を忘れて引き金を引いてしまったというだけで, 正直な勤め人に死を課すことを陪審が望むはずがないと, 弁護士は言い募るのである。

だがその熱弁も空しく, 検事の戦略の方が功を奏し, 陪審の表決の結果, ムルソーに対して「フランス国民の名において首を切られる」という判決が下される。こうして, 社会の名における不条理な死を課せられ, その死との対決を迫られる死刑囚ムルソーが誕生するのである。

第二部第5章

B-1 Couché, je passe les mains sous ma tête et j'attends. Je ne sais combien de fois je me suis demandé s'il y avait des exemples de **condamnés à mort** qui eussent échappé au mécanisme implacable, disparu avant l'exécution, rompu les cordons d'agents. (1202)

A-10 Ainsi, il me semblait qu'on pouvait trouver une combinaison chimique dont l'absorption tuerait le patient (je pensais : le patient) neuf fois sur dix. Lui le saurait, c'était la condition. Car en réfléchissant bien, en considérant les choses avec calme, je constatais que ce qui était défectueux avec le couperet, c'est qu'il n'y avait aucune chance, absolument aucune. Une fois pour toutes, en somme, **la mort** du patient avait été décidée. (1204)

15) ムルソーがありきたりの社会的コードを同様に拒絶するシーンが, 第一部第5章の冒頭で, 事務所の社長からパリへの転勤を勧められたときに, 「人生は変えられるものではありませんから」と言って断る場面である。ムルソーにすれば, 現在の生き方で充足している以上, ことさらそれを変える理由は理解できなかったわけであるが, マリーもまた, 彼のこうした価値観が理解できず, どうして「栄転」を断ったのかと, いぶかる。

D-9 Je calculais mes effets et j'obtenais de mes réflexions le meilleur rendement. Je prenais toujours la plus mauvaise supposition : mon pourvoi était rejeté. « Eh bien, je **mourrai** donc. » Plus tôt que d'autres, c'était évident. Mais tout le monde sait que la vie ne vaut pas la peine d'être vécue. (1205-06)

D-10 Dans le fond, je n'ignorais pas que **mourir** à trente ans ou à soixante-dix ans importe peu puisque, naturellement, dans les deux cas, d'autres hommes et d'autres femmes vivront, et cela pendant des milliers d'années. Rien n'était plus clair, en somme. (1206)

D-11 C'était toujours moi qui **mourrais**, que ce soit maintenant ou dans vingt ans. À ce moment, ce qui me gênait un peu dans mon raisonnement, c'était ce bond terrible que je sentais en moi à la pensée de vingt ans de vie à venir. (1206)

D-12 Du moment qu'on **meurt**, comment et quand, cela n'importe pas, c'était évident. Donc (et le difficile c'était de ne pas perdre de vue tout ce que ce « donc » représentait de raisonnements), donc, je devais accepter le rejet de mon pourvoi. (1206)

第二部において社会的自由を奪われたマルソーであったが、第4章まではあくまでも被告人としての立場であった。第5章において「死刑囚」に変身したマルソーは、初めて死というものを正面から見据え、死についての考察を繰り返す¹⁶⁾。死刑囚 «condamné à mort» という表現はこの章で初めて出現するが、それはマルソーの死刑囚としての自覚を反映している (B-1)。こうして、『異邦人』における «mort», «mourir» の用例38例のうち、なんとその半数の19例が第二部第5章に集中することになるのである。

死を免れる可能性、死の苦痛あるいは死の恐怖を免れる可能性をマルソーは考え続ける。B-1では、脱獄に成功した死刑囚の例を思い起こそうとしているが、これに引き続き、逃走のさなかに銃撃で倒れてしまうのが唯一の希望だと述懐し、逃げ延びる可能性を追い求めてはいない (p.1202最終部分)。マルソーにとって堪え難いのは、死そのものであるよりも、あらかじめ定められ数学的正確さによって執行される、ギロチンという死刑の形式なのであった。そこで考えつくのがA-10という、死刑の中に偶然的要素を持ち込む解決策である。10回につき1回だけは助かるという致死薬物によって執行するならば、死刑は免れがたい運命とは言えなくなるのだ。次いでマルソーの思念を占めるのは、明け方の恐怖性である。死刑が執行されるのは明け方であるため、彼は夜は眠らずに

16) 殺害したアラブ人の「死」についてマルソーはまったく言及しない。『異邦人』において語られる「死」は、「死」一般、母親の死、そしてマルソー自身の死だけなのである。小説の流れとしては不自然であり、この点については、①マルソーが被害者の死を死として感じられないほどの特異な感性の持ち主なのか、②なんらかの理由があってマルソーが故意に言い落としているのか、③作者カミュがあえて言及を避けているのか、3つの解釈が可能となる。テキストの内在的批評の立場に立てば①か②となるが、作者との関連のうえで総合的にテキストを捉え、とりわけどのようにテキストが生み出されたかという観点に重きを置く筆者の立場から言えば③が最も妥当な解釈と考えられる。

日の出を待つようになった。それは死刑そのものへの恐怖からというより、不意を打たれ、覚悟を定めないままに命を奪われるのではなく、自分の運命と最後まで差し向いでいたいという願望からであった (p.1205 最終部分) ¹⁷⁾。そして夜明けとともに、また24時間を獲得したという感慨に浸る。

生き延びる可能性として彼に残されているのは、結局、上訴の可能性と恩赦であった¹⁸⁾。だが、その2つとも空しい期待に過ぎないとして、最終的にムルソーは斥ける。ムルソー的論理において、ほとんど可能性のない期待にすがって、死刑囚として残された僅かの貴重な時間を空費するのは、来世での救いを求めて地上的な価値から目を背けるのと同じく (そのことを、聴解司祭は求めるわけだが)、「希望への逃避」にはかならないからだ。だが間近にせまった自己の死を感性的に納得させるのは難しい。D-9からD-12までは死を巡るそうしたムルソーの心の揺れを物語っており、「人生は生きるに値しないのは誰もが知っている (D-9)」「三十で死のうが七十で死のうが同じことだ (D-10) ¹⁹⁾」と啖呵を切ったものの、「もし自分があと20年生きられるとしたら、その20年のことを考えて心が一杯になる (D-11)」。だがそうした思いも、「人は死すべきものなのだから、それがどのようにしてであり、いつであるかは、重要なことではない (D-12)」と結論づけることで押さえ込もうとするのであった。

B-2 Pour la première fois depuis bien longtemps, j'ai pensé à Marie. Il y avait de longs jours qu'elle ne m'écrivait plus. Ce soir-là, j'ai réfléchi et je me suis dit qu'elle s'était peut-être fatiguée d'être la maîtresse d'un **condamné à mort**. (1206)

17) 死に至る最後の瞬間まで明晰な意識を保ち続けるというテーマは、カミュの世界において繰り返されるが、特に『異邦人』までのテキストにおいては重要な位置を占める。『裏と表』、『婚礼』、そして『幸福な死』において何度も言及され、『異邦人』における死刑囚ムルソーへとつながっていくのである。

18) フランスの刑事訴訟法では、当時も現在も、重罪裁判においては一審制であり、誤審を防ぐために予審制度を整備している。ムルソーの裁判においても、1年にわたる詳細な予審の後、本審はわずか数日間で結審している。上訴が認められるのは、法的手続きに問題があった場合に限られ、判決内容に関する上訴は認められていないので、ムルソーの死刑判決は確定判決である。ただし一人称体の小説であるから、主人公の死を確かめる術はなく、ムルソーが実際に刑を執行されたのかどうか、されたとしたらそれはいつなのかは、テキストの表層レベルでは確かめられない。むしろ、最終部分の直前に聴解司祭をムルソーの独房が訪れたことにより、刑の執行は近いという点は示唆されていて、最後の場面のムルソーの述懐は、執行を直前に控えた死刑囚のそれと解釈するべきではあるが。

19) ここから、ムルソーの年齢を30歳と推定している評者もいるが (例えば松本陽正氏)、やや行き過ぎた解釈であろう。30というのは、「あと数年生きたら30になる」という意味で持ち出された数字と解釈するべきである。『幸福な死』におけるのと同様、『異邦人』執筆時には、カミュは自らの年齢をほぼ直接主人公に投影させて執筆しており、ムルソーは「若者」として定義されている。例えば第一部第3章の冒頭で同僚のエマニュエルと競争して疾走するトラックの荷台に駆け登るというシーンはどう見ても20代の若者のものであるし (このシーン自体は、『幸福な死』からの引用であるが)、第1章では、老人施設の院長はムルソーに対して«vous êtes jeune»と言明している (p.1128)。また、第二部で逮捕後独房に入れられたムルソーが性欲のはけ口に苦しむシーンでは、«j'étais tourmenté par le désir d'une femme. C'était naturel, j'étais jeune.» (p.1180) と述懐しているのである。以上から、ムルソーは明らかに30歳未満であり、20代半ばを過ぎたあたりと考えるのが自然であろう。

D-13 L'idée m'est venue aussi qu'elle était peut-être malade ou **morte**. C'était dans l'ordre des choses. Comment l'aurais-je su puisqu'en dehors de nos deux corps maintenant séparés, rien ne nous liait et ne nous rappelait l'un à l'autre. (1206-07)

D-14, A-11 À partir de ce moment, d'ailleurs, le souvenir de Marie m'aurait été indifférent. **Morte**, elle ne m'intéressait plus. Je trouvais cela normal comme je comprenais très bien que les gens m'oublient après **ma mort**. Ils n'avaient plus rien à faire avec moi. Je ne pouvais même pas dire que cela était dur à penser. (1207)

このように人生への未練を断ち切っていくムルソーに残された最後のこだわりは、マリーへの思いであった。ムルソーにとってやはり、マリーは単なる肉体的欲望の対象としてではなく、ある種の感情的なこだわりの対象であった。第一部で彼女に対して「愛していない」とムルソーが言明したのは、感情的にならこだわりをもっていないという意味ではなく、「愛する *aimer, to love*」という表現を男女間で使用するときに欧米社会では必然的に生じる社会的コードを拒否したに過ぎない。予審の時には面会に来たマリーから絶えて便りがなくなり、「彼女は死刑囚の恋人であることに疲れたのだろう (B-2)」とムルソーは考え、ついで、「もう死んだのかもしれない (D-13)」とも思う。独房と死刑制度によって引き裂かれて二度と会わなくなった以上、死んでいても生きていても同じことなのだが、マリーが死んだと仮定すると、もう彼女に対する関心が薄れていくのをムルソーは感じる (D-14)。おそらく、母親に関しても、その死後、ムルソーの関心が急速に薄れたのであろう。そして、自らも、死を迎えた後人々から急速に忘れ去られていくことを自覚する (A-11)。こうして、迫り来る死に対して、ムルソーは自力で、ほとんど「解脱」に近い境地にまで達するのである。

B-3, B-4 Quand il [l'aumônier] a eu fini, il s'est adressé à moi en m'appelant « mon ami » : s'il me parlait ainsi ce n'était pas parce que j'étais **condamné à mort**; à son avis, nous étions tous **condamnés à mort**. Mais je l'ai interrompu en lui disant que ce n'était pas la même chose et que, d'ailleurs, ce ne pouvait être, en aucun cas, une consolation. (1208)

D-15, 16 « Certes, a-t-il approuvé. Mais vous **mourrez** plus tard si vous ne **mourez** pas aujourd'hui. La même question se posera alors. Comment aborderez-vous cette terrible épreuve? » J'ai répondu que je l'aborderais exactement comme je l'abordais en ce moment. (1208)

D-17 Et sa voix non plus n'a pas tremblé quand il m'a dit : « N'avez-vous donc aucun espoir et avec la pensée que vous allez mourir tout entier? — Oui », ai-je répondu. (1208)

自己を偽らないというモラルを貫くあまり死刑判決を招き寄せ、迫り来る死に対しても地上的な価値観で対峙しようとするムルソーの元へ、最後に聴解司祭が訪れる。そして地上的な価値観から天上的な価値観への転向を促し、来世における救いを信じることで死の恐怖を免れよと迫るのだ。司祭による「ムルソーがことさら死刑囚であるから改悛を勧めに来たのではなく、人はみな死刑囚

であるのだ」というパスカルの言辞に対して (B-3, B-4), その比喩的意味に歩み寄ろうとはせずに
ムルソーは、あえて字義通りの解釈を突きつけて「その2つは同じことではない、何の慰めにもな
らない」と言明して、司祭の論理を脱キリスト教化する。今日死を迎えないとしても、いずれは死
を迎えるのであり、その試練にどのように立ち向かうつもりか、つまり、悔い改めて来世を願うべ
きではないか (D-15, D-16), とさらに迫る司祭に対して、死がいつ来ようが、今こうして対処して
いるのと同じに対処する、とムルソーは返答する。つまり、来世への希望などにすがることなく、
地上的な価値に止まり続け、最期の瞬間まで明晰に死を見据えることで「全き死を迎えること」(D-
17) を受け入れるというのだ。

C-3, A-12 Il avait l'air si certain, n'est-ce pas? Pourtant, aucune de ses certitudes ne valait un
cheveu de femme. Il n'était même pas sûr d'être en vie puisqu'il vivait comme **un mort**. Moi,
j'avais l'air d'avoir les mains vides. Mais j'étais sûr de moi, sûr de tout, plus sûr que lui, sûr de
ma vie et de **cette mort** qui allait venir. (1210)

A-13 Que m'importaient **la mort** des autres, l'amour d'une mère, que m'importaient son Dieu,
les vies qu'on choisit, les destins qu'on élit, puisqu'un seul destin devait m'élire moi-même et
avec moi des milliards de privilégiés qui, comme lui, se disaient mes frères. (1210-11)

ムルソーと司祭の対決は平行線を続ける²⁰⁾。信仰による救いを拒絶し続けるムルソーが理解でき
ない司祭は、それでも「あなたのために祈ろう」と告げる。これは、ムルソーの存在意義そのもの
であった、地上的な価値を貫くという姿勢を否定し、その存在を無と化し、不条理な定めであった
その死を、宗教的価値から正当化するという象徴的な行為であった。社会制度に基づく人の裁きと
しての死刑は受け入れたムルソーであるが、神の名における死の宣告だけは認めることができな
かった。こうしてムルソーは、最後の最後になって、激越な反抗の声を上げる。司祭に対して、宗教
的「救い」に対して、世界をこのように作り上げた一方ムルソーに死を強いる造物主に対して。地
上の価値を認めない司祭は、彼の目からすれば死者も同じである (C-3)。だがムルソーの方は、迫
り来る死から目を背けずに明晰な意志で立ち向かう構えができていた (A-12)。地上的な価値にお
いて、一個人の死は、代替不可能な絶対的な消滅であって、それは、その生が代置できない特権的

20) プレイヤッド版の注解によれば、D-17を含むパッセージに続く4つの段落は、1941年5月に完成した『異邦人』草稿にはなく、その後の加筆修正で加えられたものだという。『異邦人』においては、草稿からの変更はごくわずかに止まり、これは例外的な修正である。オリヴィエ・トッド (評伝『カミュ』、前掲書) や、『カミュ パスカール・ピア往復書簡』(Fayard/Gallimard 2000年) によれば、『異邦人』草稿を読んだマルローは、いくつかの修正点を示唆し、それがピア経由でカミュに伝わった。その中に、司祭のシーンがリアリティに乏しいという指摘があるので、4段落の加筆は、この示唆に応えたものであろう。しかしながら、上記の解説で明らかかなように、カミュの内的論理においては、ムルソーと司祭との根本的な対立はD-17までで充分に表現されていた。テーマを抽出するという姿勢で読むと、したがって、司祭とのシーンの後半は、『異邦人』の他の部分と比べて冗長な感を与えるのは否めない。

なものであるのと同じことであり、したがって誰にとっても、他者の死というものは結局、自らに直接関わる事柄ではないと、主人公は宣言するのである (A-13)。

A-14 Pour la première fois depuis bien longtemps, j'ai pensé à maman. Il m'a semblé que je comprenais pourquoi à la fin d'une vie elle avait pris un « fiancé», pourquoi elle avait joué à recommencer. Là-bas, là-bas aussi, autour de cet asile où des vies s'éteignaient, le soir était comme une trêve mélancolique. Si près de **la mort**, maman devait s'y sentir libérée et prête à tout revivre. Personne, personne n'avait le droit de pleurer sur elle. (1210)

ムルソーの反抗の叫びはなおも続くが、看守が止めに入り、司祭を救い出す。その後のムルソーに、不思議な静謐の瞬間が訪れる。常に行動の指針ではあったもののそれまでは他者に対して明確に言語化したことはなかった地上的価値観を言明することができたこと、それが個別司祭という存在に対してだけではなく、その向こうにある、造物主によるこの世の成り立ちそのものに対する反抗の叫びという形をとったことが、ムルソーにとって、究極のカタルシスとなったのである。今や死という定めを完了するだけとなったムルソーは、久しく考えたことのなかった母親のことを思い出す。そして、亡き母親に対して、死を前にしたからこそ逆説的に死から解放されるのだという、死にゆく者としての共感の思いを抱くのであった (A-14)。このようにして小説『異邦人』は幕を閉じるのである。

6-3. 死の起源

6-3-1. 不在の父親

『異邦人』における「第一の死」は、しかしムルソーがじかに目の当たりにした死ではなかった。ムルソーは施設からの電報によって母親の死を「知る」のみであり、母親は、作品の冒頭からすでに存在していない、いわば「不在の登場人物」として現われるのである。

カミュの実人生においても、このような「あらかじめ不在である登場人物」がいた。第一次大戦で倒れた、父親リュシアン・オーギュスト・カミュである。その次男としてアルベールがアルジェリアのモンドヴィで生まれたのは1913年11月7日、その頃、地中海を隔てたバルカン半島においては緊張が高まりつつあった。そして、翌14年の7月末に第一次世界大戦が勃発し、8月3日にはドイツがフランスに宣戦布告を行った。1906年から8年にかけて一度兵役に就いていた父リュシアンは再び召集され、アルジェリア歩兵部隊の一員として、8月下旬から始まった第一次世界大戦初期の大激戦、マルヌの戦いに参加し、砲弾の破片が頭部にあたるという重傷を負う。ブルターニュ地方のサン＝ブリューの病院に収容された彼は1914年10月11日に死亡し、その地に葬られる。戦死の報は、ムルソーの元へ老人施設から届いた知らせと同じく、電報で、カミュの母親の元へ届けられる。当時満一歳にも満たないカミュには、その事情を理解することはおろか、7月までともに過ごしていた父親の面影を記憶することも不可能であった。

物心ついてからカミュが認識することになる初めての死とは、このような、絶対的な不在としての死だったのである。カミュの原体験にとって死とは、少なくとも他者の死とは、生身の肉体が活動を止めることや、生物的な恐怖としてではなく、「存在の欠落」という形で深く刷り込まれたのではなかろうか。そうした死生観は、第2節で詳しく見た、独房における死刑囚マルソーのモノローグにも明らかに投影されていると思われる。不在のマリーはマルソーにとって死者と同じであり、処刑されたマルソーは、残された人々にとって「不在」でしかなくなる。ここから生じるのが死に対するある種透明なイメージであり、死刑囚の言葉にしては生々しさ＝リアリティが感じられないという一部の批評が生じる所以でもある²¹⁾。

「不在としての死」は、『異邦人』にのみ特徴的な設定ではない。既に指摘したように、戯曲『カリギュラ』においては、カリギュラの人生を激変させる契機となるドリュジラの死は、芝居の幕が開く前に起こった出来事であり、ドリュジラは、名前だけの存在として『カリギュラ』の地下水脈を流れていく。『誤解』においては、母と妹の元を去って長い年月を経た結果、ジャンは二人に対してもはや死者にも等しい存在となってしまったからこそ、息子だとも兄だとも認識されることがない²²⁾。旅行客と間違えられ、金品を奪われた彼は、水の底へと沈められて「真の死」を遂げる。また、小説『ペスト』においては、中心人物の一人であり物語の語り手でもある医者リウーの妻は、ペストによってオランの町が閉鎖される前に遠くの療養所に赴いていたために、ペストが猛威を奮うその間、リウーにとって「不在の存在」でしかなくなる。そして、ペストが終息しオランが解放されるその直前に妻は療養所で死に、その知らせを、リウーはまさに電報で受け取るのであった。

それでは、「不在」というありかたではなく、父親のテーマそのものは、カミュにとってどのような意味を持ったのであろうか。この点については、ジャン・サロッキのように、「不在の父親」を探し求めるテーマがカミュにおける根源的なテーマだと主張する批評家もいる²³⁾。しかしながら、カミュの実人生において不在の父親への思いがどのように深いものであったにもせよ、テキスト・レベルでは、「父親」は、カミュにとって普遍的なテーマとは言い難い。これに対して「母親」は、1935年に書き始められた「ノート」の冒頭の断章が「母親に対する不思議な感情」について述べていることによって象徴的に示されているように²⁴⁾、カミュの作家人生を通じて偏在するテーマとなっている。この点を明確にするために、カミュの主要テキストにおける語彙 «père» と «mère» の出現率を、デジタル・データに基づく検索によって比較してみよう。ただし、「père」については、「神父」など宗教的な意味で用いられるものは除外することとし²⁵⁾、一方、「mère」に関しては愛称 «maman» がほぼ同義語と考えられるので、併せて検索することとする。むろん、「père» や «mère»

21) たとえば、『死刑囚の記録』（中公親書）などの著作のある作家加賀乙彦は、そのような不満を漏らしているが、リアリズムというものは作家カミュにおいては規範ではなかったことを指摘しておきたい。

22) また、『誤解』では、ジャンの父親はずいぶん前に亡くなっている。

23) Jean Sarracini, *Le dernier Camus ou «Le Premier homme»*, Paris: Nizet, 1995. 本書は、『最初の人間』を総合的に検討した研究書として値打ちが高いが、カミュにおける根源的なテーマを「父親の探求」と単純化するあまり、偏った議論が随所で認められ、また著者の銜学趣味も時に堪え難いものがある。

という単語がどれも直接間接にカミュの父親や母親のイメージとつながるわけではなく、一般的に用いられる場合や、単に登場人物の親を指しているだけという場合も多いわけだが、全体を通じての相関関係は把握することができるだろう。

【表6-3】

ジャンル	作 品	行数	père		mère+maman		mère		maman	
			出現数	出現率	出現数	出現率	出現数	出現率	出現数	出現率
小説	『幸福な死』	2439	3	1.2	20	8.2	18	7.4	2	0.8
	『異邦人』	1986	5	2.5	80	40.3	30	15.1	50	25.2
	『ペスト』	5553	15	2.7	51	9.2	50	9.0	1	0.2
	『転落』	1996	5	2.5	1	0.5	1	0.5	0	0.0
	『追放と王国』	2885	14	4.9	2	0.7	2	0.7	0	0.0
	『最初の人間』	4712	73	15.5	144	30.6	135	28.7	9	1.9
戯曲	『カリギュラ』	891	10	11.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	『誤解』	745	2	2.7	52	69.8	52	69.8	0	0.0
	『戒厳令』	1200	10	8.3	5	4.2	5	4.2	0	0.0
	『正義の人々』	790	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
エッセイ	『裏と表』	818	7	8.6	21	25.7	20	24.4	1	1.2
	『婚礼』	814	2	2.5	2	2.5	2	2.5	0	0.0
	『夏』	1341	1	0.7	2	1.5	2	1.5	0	0.0
	『シーシュポスの神話』	2477	2	0.8	2	0.8	2	0.8	0	0.0
	『反抗する人間』	7196	11	1.5	6	0.8	6	0.8	0	0.0
政治評論	『ドイツ人の友への手紙』	492	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	『ギロチンに関する考察』	1138	11	9.7	7	6.2	6	5.3	1	0.9
	『時事評論集Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ』	7381	7	0.9	1	0.1	1	0.3	0	0.0
資料類	『ノート1』	2485	12	4.8	30	12.1	26	10.5	4	1.6
	『ノート2』 + 『旅日記』	5456	8	1.5	23	4.2	22	4.0	1	0.2
	『ノート3』	3535	26	7.4	42	11.9	36	10.2	6	1.7
	『初期作品集』	2160	2	0.9	17	7.9	17	7.9	0	0.0
	『キリスト教形而上学』	2071	3	1.4	7	3.4	7	3.4	0	0.0
	合計・平均	60561	229	3.8	515	8.5	440	7.3	75	1.2

このように、「mère, maman」に対して「père」の出現率は半数以下であるとともに、総計だけではなく「mère, maman」が「père」を上回っているテキストが多いことが明らかになる。「père」が明らかに上回っている『カリギュラ』では、皇帝カリギュラの友人である詩人シピオンの父親（後に見るように、カリギュラに殺された）に関して何度も言及されたためであり、『戒厳令』では、ヒロインのヴィクトリアが、判事である父親を何度も「père」と呼ぶために数として多くなっているに過ぎない²⁶⁾。明らかに、1950年頃までの初期・中期のカミュにおいては、父親のテーマがテキストの中

24) *Carnet I*, pp.15. «Qu'on peut avoir sans romantisme la nostalgie d'une pauvreté perdue. Une certaine somme d'années vécues misérablement suffisent à construire une sensibilité. Dans ce cas particulier, le sentiment bizarre que le fils porte à sa mère constitue toute sa sensibilité.» (イタリックは原文)

25) 宗教的な意味で使用されている「père」は、131例が認められる。中でも多いのは、学士論文『キリスト教形而上学とネオプラトニズム』(30例)と、パヌルー神父が活躍する『ペスト』である(51例)。

26) その逆が、主人公マルタがいくども「mère」と呼びかける『誤解』である。

心に据えられることはなかった。この事情が一変するのが1950年代の第三期においてであって、『ノート3』、『追放と王国』、そしてなによりも遺稿『最初の人間』において、「père」の出現数が高くなっている²⁷⁾。父親のテーマが作家カミュの世界において重要な位置を占めるようになったのは、やはり晩年、それも『最初の人間』の構想を通じてであると考えるべきであろう²⁸⁾。

とりわけ、『異邦人』に至るまでのテキスト群では「père」の出現率は極めて低く、なかでも、直接自らの父親に取材したものは、『初期作品集』に収められた「貧しい地区の声」（1934）におけるテキストと、それを書き直して用いたエッセイ「肯定と否定の間」（『裏と表』所収、1936）におけるテキストに過ぎない。

「貧しい地区の声」における父親への言及は、それが現存するカミュ・テキストにおいて初めて「père」という語が出現したケースという意味でも重要なものであるが、父親の戦死とその後の母親の姿を語る場面で現われている。つまり、母親あるいは他の家族（特に祖母が考えられる）から繰り返し聞かされたと思われるエピソードであり、この話を通じて幼いカミュは、人の死というものについて最初のイメージを形成したと考えられるのである。

その夫が亡くなった。よく言われるように、「名誉の戦死」を遂げたのだ。そして戦時勲章と功労メダルが、しかるべきところに、金箔の額縁に収められている。戦時病院はまた、戦争未亡人の元へ、遺体から取りだされた砲弾の破片を送ってきた。未亡人はそれをとっておいた。もう長いこと、苦しみは覚えていない。彼のことを、夫としては忘れてしまった。だが子供たちの父親としては、まだ語りつづけている。²⁹⁾

決して会うことのない父親の姿を、それでも息子カミュはなんども思い描こうとしたのであろう。よくある話であるが、家族や母親は、息子が父親似であると言って聞かせた。父親リュシアン・カミュの、アルジェリア歩兵連隊の制服を着込んだ現存する写真を見るかぎり、写真の質が悪いせい

27) 特に、『最初の人間』が、カミュ・テキスト全体における「père」の用例の三分の一も占めている。また、『ノート3』における用例のほとんどが、『最初の人間』のためのメモの中で現われている。ただし、遺稿『最初の人間』は（完成した小説がどのようになったかは謎だが）、主人公が生まれる冒頭のシーンを除いてはほとんど自伝と読んでもよいテキストであるため、必然的に、「mère, maman」の出現率も群を抜いて多くなっている。

28) 最初の構想が形を取るのは1953年頃であり、54年にかけてさまざまな着想や断章が「ノート」に記されるが、その後1959年まで、カミュはまとまったテキストを書くことができなかった。父親のテーマが1950年代になって大きな位置を占めるようになってきたのにはさまざまな理由があるだろうが、やはり、子供が大きくなるにつれてカミュ自身の父親であるという自覚が深まったことと、自らが亡き父親の年齢を超えてしまったという思いの二つが、大きな要因だろう。この後者の思いについては、遺稿『最初の人間』の中で感動的に描かれている。なお、筆者は、『異邦人』への道の完結後は、『最初の人間』に関する総合的論文に取り組む予定でいる。

29) 『カイエ・アルベール・カミュ2—初期作品集—』p.273。ゴチック強調は筆者。このパッセージは、一字一句そのままに、「肯定と否定の間」で用いられている（「エッセイ篇」, p.25）。

もあるが、大人になったアルベールとあまり似ているようには思われぬが、家族というものは、このようにして数々の固有の「神話」を紡ぎ出すものなのである。かくして、エッセイ「肯定と否定の間」では、母と子は、次のような会話を交わす。

「本当かい、僕が父さんに似ているっていうのは？」

「ああ、瓜二つだよ。もちろん、お前に分かりっこなかったよね。まだ生まれて半年だったもの、父さんが亡くなったときには。でも、お前がちょびヒゲでも生やしていたとしたら！」

30)

だがアルベールは、結局は父親の姿を明確にイメージすることはできなかった。「肯定と否定の間」の話者は、母との会話に引き続いて、次のように語るのである「父について語っても、確信は持てなかった。何の思い出も、何の感慨もない。たぶん、どこにでもいるありふれた男だったのだろう」。後年、『最初の人間』に取り組もうとした動機を中心を成したものは、長年暖めていた「母親の不思議な沈黙」のテーマに加えて、創造世界で父親の姿を蘇らせることであった。遺稿を読むかぎりその後者の意図は、小説冒頭の、身重の妻を伴ってブドウ園の管理人として赴任する、主人公の父親の生き生きとした姿として、部分的には成功を収めているだろう。しかしながら、1953年ごろに『最初の人間』のために『ノート3』に書きつけたメモの一つの中で、結局はこの試みが蜃気楼のごときものに過ぎないという自覚を、カミュは同時に抱いていたのである。

父親の姿が少しは心に描けたかに思う。ついで、すべてかき消える。結局、何もありはしない。この地上では、いつもこんなふうだったのだ。³¹⁾

6-3-2. 祖母の死

身近な存在の死としてカミュが初めて具体的に触れたのは、本論文第2部で検証したように、祖母カトリーヌ・サンテスの死であった³²⁾。ことばが不自由であるうえに気弱な娘に代わって祖母は家の中の一切を取りしきり、家族の間で空いた「父親の役割」を、それも強権的な存在として、埋めるようになる³³⁾。カミュ兄弟はこの祖母によって、時には体罰も伴う厳しいしつけを受けたが、弟のアルベールは学校の成績が良く、祖母にとって自慢の孫であった。そして、当時のアルジェリアでは最大の娯楽であった映画（無声映画）を見に行くとき、字が満足に読めない祖母は、アルベールを伴っては字幕を読んでもらうのであった。祖母はこの孫に対して愛情を強要し、人前で、「母

30) 『裏と表』所収の「肯定と否定の間」, 「エッセイ篇」 p.29.

31) *Carnets III*, p.101. 「ノート3-1」第337断章。

32) 『『異邦人』への道(2)』(『人文社会論叢』所収)の57-63頁を参照。

33) 当時のカミュの一家は、祖母に母、そして母の弟とカミュ兄弟の、5人家族であった。

親よりもおばあちゃんの方が好きだ」と言わせようとする。ムルソーのように「意に沿わないことは、たとえ重罪裁判で不利に扱われようが決して口にしない」といった毅然とした姿勢を示すべくもない幼い子供は、祖母の言う通りに従い、「母親を裏切っているのではないか」という自責の念に苛まれる。この原体験は、後年の「本心ではないことは決して語らない」ムルソーという独特な登場人物の造形にかなり影響を及ぼしたことであろう。

こうして少年カミュはこの祖母に対して愛憎半ばする感情を抱きながら育つたらしいが、反抗期においてはその反抗の対象は気弱な母ではなく、父親代わりであると同時に母親のライバルであったこの祖母に主として向けられたように思われる。ロットマンの評伝によれば祖母は晩年に病気がちとなり、1931年の5月～11月の間に死亡したということであるが³⁴⁾、1933年に書かれ、「勇氣」*«le Courage»*という題名で『初期作品集』に収められたエッセイの断片の中に現われる祖母の最後の時期の姿は³⁵⁾、非常に皮肉のこもった筆致で描かれているからだ。

祖母はまた、肝臓の病いが原因で起こる激しい嘔吐に苦しんでいた。だが、その病いの発作を行うのにいかなる慎みも見せようとはしなかった。人目を避けるどころか、激しい音を立てて台所のごみ箱に吐き散らすのである。[...] 子供たちは、祖母の嘔吐にも、祖母が言うところの「発作」にも、苦痛の訴えにも、気をとめないようになってしまった。祖母はある日ベッドから起き上がれなくなり、医者と呼べと言った。言うことを聞いて、医者に往診を頼んだ。最初の見立ては、体調を崩したのだらうということだった。二度目には、肝臓癌ということになり、そして三度目の診察では、重症の黄疸ということになった。だが、二人の子供のうちの弟の方は、それがまた新しいお芝居、より手の込んだ仮病にしか思えなかった。³⁶⁾

実際には、仮病などではなく、重病なのであった。こうして「第二の父親」でもあった祖母は死ぬが、その埋葬がカミュにとっての埋葬のイメージの原体験を形作ったと考えられる。エッセイの

34) ロットマン『評伝カミュ』p.54 (英語版)、p.67 (フランス語版)。なお、ロットマンの評伝を下敷きにしたうえでさらに詳しい情報に触れることができたはずのトッドによる評伝は、細部の詰めの甘さが目立ち、祖母の死に関してはなんら記されていない。また、ロットマンによればこの頃のカミュは、結核の療養も兼ねて、肉屋の叔父ギュスターヴ・アコーの所で下宿していたので、祖母の死に目には会えなかったか、危篤という知らせを受けて駆けつけたか、どちらかの可能性がある。

35) 上記の、カミュの母親と孫の愛情を争う祖母の姿も、この「エッセイ」の断片「勇氣」で描かれている。そして「勇氣」は、1936年の『裏と表』の冒頭に収められたエッセイ「皮肉」における三番目のエピソードとして、ほとんどそのままの形で利用されている。「皮肉」の残り2つのエピソードは、1934年の「貧しい地区の声」の5つのエピソードから取られている。「貧しい地区の声」の残り3つのエピソードのうち、2つが「肯定と否定の間」に利用され、最後に残った「音楽によってかき立てられる声」のエピソードが『幸福な死』で用いられることになる。

36) 『初期作品集』pp.220-221. また、『裏と表』所収の「皮肉」(プレイヤッド版「エッセイ篇」) pp.20-22も参照。

断片「勇氣」においては、埋葬の日、話者は自分が悲しみを感じているのかどうか、確信が持てない。そして「人並みに涙がどっとあふれてきたので、泣いた。けれども、死んだ祖母を前にして自分が誠実ではないのではないか、嘘をついているのではないか、という不安を味わっていた」。本論文第2部でも分析を行ったように、この体験もまた、『異邦人』において母親の埋葬に立ちあいながらも「涙は流さない」ムルソーの造形の出発点となっているだろう。もし悲しみという感情が明確に形を取っていないのならば、社会的コードとして期待されているようにみせかけだけの涙を見せるよりも、平常と変わらない態度を取ったほうが死者に対して誠実と言えるのではないか。祖母の死に際して自己を偽ったという悔恨を抱いたカミュにとって、『異邦人』第一部第1章の執筆は、祖母に対する贖罪という機能も果たしたのであろう。

【表6-4】

ジャンル	作 品	grand-mère	grand-père
小説	『幸福な死』	0	1
	『追放と王国』	0	1
	『最初の人間』	178	3
戯曲	『戒厳令』	1	0
エッセイ	『裏と表』	6	0
資料類	『ノート2』 + 『旅日記』	2	3
	『ノート3』	2	1
	『初期作品集』	8	0
		198	9

さらに、カミュ・テキストにおける祖母 «grand-mère» という単語の用例を検索すると、[表6-4]のように³⁷⁾、«mère»、«père» と同じコーパスにおいて198例見つかるが、そのほとんどがエッセイの断片「勇氣」(7例)、「勇氣」のテキストを引用したエッセイ「皮肉」(5例)、そして自伝的テキストである遺稿『最初の人間』(178例!)で占められている。なんと、若書きのエッセイから20数年を隔てた遺稿までのあいだ、カミュは «grand-mère» という単語を記すことがほとんどできなかったわけである。加えて、カミュ自身の祖母を指していないと明確に指摘できる用例は、わずか5例にすぎない(『戒厳令』1例、「ノート」3例、『旅日記』1例)。このように、«grand-mère» という単語は、カミュにおいては実際の祖母のイメージを離れては使いがたい、極めて個人的色彩の強い語彙と化してしまっただけであり、それほどまでに、幼いカミュに与えた祖母の影響は奥深い

37) 作品名は、«grand-mère» および «grand-père» が認められる作品に限ることとし、表を簡略化した。また、出現率もこの場合はあまり意味がないので省略した。

ものがあつたと推測されるのである³⁸⁾。

6-3-3. 発病と自己の死の覚悟

しかしながら、カミュが「死」というものをごく初期から文学創作のテーマの中心に置こうとした直接の動機は、なによりも、結核の発病と、十代にして自己の死を覚悟したという痛切な体験に求められるだろう。

『評伝カミュ』の作者ロットマンは、アルジェ大学の学生が発行していたスポーツ広報誌『リュア』に掲載されていたリセのサッカーチームの戦評を調査し、1930年10月末の試合までは、カミュがゴールキーパーとして試合に参加していたものの、1931年1月20日号の『リュア』誌には「若いキーパーが病気で欠場した」とあることから、カミュの最初の結核の発作は、1930年12月から31年1月の前半にかけてのことであると断じている³⁹⁾。また、カミュ自身も、晩年の1959年に研究家カルル・ヴィジアニに対して行ったインタビューで、発病は1930年12月のことだと述べている⁴⁰⁾。発病後の咯血の状態は、かなり深刻なものであったらしい。当時、結核の特効薬であるストレプトマイシンはまだ存在せず⁴¹⁾、結核は「死病」となる危険性があつた。名誉の戦死を遂げたフランス人兵士の息子であつたカミュには、不幸中の幸いにも、医療費無償の権利があり、アルジェ市立のムスタファ病院に入院した。医師の診断では、右肺が空洞を伴ったチーズ様潰瘍の状態だったが、胸膜への癒着はなかつたと言う⁴²⁾。肺の空洞を処置するために、カミュは肺と胸郭の間にある胸膜腔に空気を送り込み、肺を圧迫して患部を固定し癒着を待つという、人工気胸法を施されなければならなかつた。ムスタファ病院の大部屋における入院体験はカミュにとってかなり苦痛であつたらしく、叔父ギュスターヴ・アコーに懇願して、その家で療養させてもらうことになつた。前述の祖母の死は、その期間のことであり、少年カミュは、その死を、自らに迫り来るかもしれない不条理な死と引き比べて考えざるを得なかつたのではあるまいか。

テキスト表現に関して極めて慎み深かつたカミュは、生涯自らの活動を縛り続けた病いに関して直接的な形で語ることはほとんどなかつた。自らの発病体験に関して最も直接的な証言を行ったの

38) «grand-père»は9例見つかるが、そもそも「祖父」はカミュが生まれる前に亡くなつただけではなく、父親とは違つて「不在の存在」ともならなかつたので、テキストに現われる語彙として少なくなるのは当然である。「grand-mère ?」に関しては、20数年間ほぼ使用するのを「封印」し続けた、という点が特徴的なのである。

39) ロットマン『評伝カミュ』pp.41-42 (英語版), pp.53-54. (フランス語版)。

40) Carles Vigianni, «Notes pour le futur biographe d'Albert Camus» in *Serie Albert Camus* 1, 1968, pp.200-218 (*Lettres Modernes*) のうち、質問第54 (p.209) ヴィジアニ自身もカミュ伝の執筆を志していたらしいが、果たせずに終わったと思われる。

41) ストレプトマイシンは、1944年、アメリカの微生物学者ワックスマンが、放線菌であるストレプトミセス・グリゼウスの培養液から抽出した。晩年の約10年間、カミュはストレプトマイシンの投与を受けられるようになったが、それ以前にカミュの肺は痛めつけられており、ある医師の診断では、不幸な交通事故に遭わなかつたとしても、カミュはその後10年生き延びられたかどうか、であつたと言う。

42) オリヴィエ・トッド、『カミュ伝』p.46。

は、『裏と表』のための断片」というタイトルで資料としてプレイヤッド版の注解に収められたテキストにおいてであるが⁴³⁾、これはおそらく1933年から34年の間に書かれたと想定され、手書き草稿という形でカミュの死後発掘されたもので、生前はまったく人の目に触れることはなかったものである。

①いまだ彼にはどうしても説明がつかないのは、自分の息子を重病が襲った時に母親が示した奇妙な態度だった。最初の発作の時、喀血が膨大な量になっても、母親はほとんど恐怖を示さなかった。たしかに、不安げな様子は見せたが、それは、近親者が頭痛に苦しんでいる時にまともな感性の持ち主なら誰でも見せるような様子にすぎなかった。[...] とはいえ、母親は息子の病状が重いのがわからないわけではなかった。だが、このようにして、その驚くべき無関心な態度を保ち続けたのである。考えてみるとより驚くべきなのは、そのことで母親を咎めたいと考えたことがないということである。暗黙の了解が母と息子を結びつけていた。彼自身も、母親が病気がなったとき、ありふれた懸念の思いしか抱かなかったことを覚えていた。[...]

②よく考えてみて、彼は自分が死ぬことなどありえないと判断した。あえて結論を下そうとしたことなどなかったのだ。そうではなく、一つの事実を確認するにとどめた。病状が最も重くなつた時、医者は暗にもう見込みはないと彼に伝えていたのである。そのことに疑いの余地はなかった。それに、彼は死の恐怖に取り憑かれていたのである...⁴⁴⁾

ロットマンもトッドも、少年カミュの結核の発作に際して最も衝撃を受け、アコー家まで救いを求めに行ったのは祖母だったと伝える。言語障害と夫の戦死による精神的ショックがおそらくは原因となって、感情表現もなめらかなには行えなかったカミュの母親は、息子の重病に際しても、客観的には冷静と受け取られかねないような反応を示したらしい。病気の恐怖におののく少年カミュは、こうした母親の対応に明らかに不安の念を抱いたのであろう。テキスト①ではしかしながら、愛する母親のために弁護を行い、「無関心 *indifférence*」という語彙に独特のニュアンスを与え、互いに深い所で理解しあっているのだから、ありきたりな言葉や大げさな身振りで心配な思いを表現する必要はないのだと語っている。本論文第2部や第3部の冒頭でも述べたように、真に理解しあっている存在同士には社会的コードに基づくありきたりの表現は不要なのだという姿勢は、『異邦人』におけるムルソーの振る舞いや母親の死に際しての態度を理解する鍵となるものだが、その源流がこ

43) プレイヤッド版第2巻で『裏と表』の校訂を行ったロジェ・キヨは、このテキストが『裏と表』のためのメモであると考えているが、「皮肉」で全面的に利用された「勇気」や、「皮肉」及び「肯定と否定の間」で使用された「貧しい地区の声」とは異なり、このテキストは『裏と表』に収められたエッセイには利用されておらず、全く異なった性格のテキストと捉えるべきである。

44) 「エッセイ篇」, pp.1214-15. 傍点による強調は筆者。

ここに認められると言ってよいであろう⁴⁵⁾。

テキスト②は、その矛盾した表現そのものによって、突然の発病に際しての少年カミュの揺れ動く不安な心理を如実に物語っている。少年は、一方で死ぬはずはないと強く自らに言い聞かせながらも、死の可能性を真剣に考え、その恐怖におののいていた。とりわけ、「医者からもう見込みはないと暗に伝えられた「le docteur le condamnait implicitement」」という体験は、痛切なトラウマとなって彼の内面に刻み込まれたであろうことは、想像に難くない。

むろん、不幸にして治療困難な病気に罹る人間は昔も今もあまた存在するし、1930年代にアルジェリアで結核にかかった人々も数多くいた。カミュにおいて重要なのは、発病体験そのものではなく、発病が契機となって抱いた世界認識のありかたであり、その世界認識をその後どのような形で抱き続けたか、またそこからどのような文学的な果実を生み出しえたか、ということである。次節以降では、この点を、おおまかに検証することとしよう。

6-4. 病いの淵から

6-4-1. 結核と「病い」

結核という病気を通じて、常に死の可能性を考えざるを得ないという十字架を背負ったカミュではあるが、その主要テキストを通じて、「結核 tuberculose」や「結核に関する／結核患者 tuberculeux」という語彙は、実はほとんど用いられていないのである。それに対して「病気 maldadie」や「病気の／病人 malade」という単語は、かなりの頻度で使用されている。この点を、【表6-5】で明らかにしよう。

45) このテキストは、] «indifférence»という語彙をカミュ独特の肯定的なニュアンスで用いた最初のものでもある。こうした用法は、その後の「肯定と否定のあいだ」における母親のイメージとして深化されて後、『異邦人』の最終章で「世界の優しいindifférence」という宇宙的なイメージまで拡大されることになる。

【表 6-5】

ジャンル	作 品	行数	maladie		malade		tuberculose		tuberculeux	
			出現数	出現率	出現数	出現率	出現数	出現率	出現数	出現率
小説	『幸福な死』	2439	6	2.5	10	4.1	2	0.8	1	0.4
	『異邦人』	1986	4	2.0	3	1.5	0	0.0	0	0.0
	『ペスト』	5553	66	11.9	95	17.1	1	0.2	0	0.0
	『転落』	1996	0	0.0	1	0.5	0	0.0	1	0.5
	『追放と王国』	2885	1	0.3	3	1.0	0	0.0	0	0.0
	『最初の人間』	4712	4	0.8	9	1.9	1	0.2	0	0.0
戯曲	『カリギュラ』	891	6	6.7	3	3.4	0	0.0	0	0.0
	『誤解』	745	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	『戒厳令』	1200	4	3.3	2	1.7	0	0.0	0	0.0
	『正義の人々』	790	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
エッセイ	『裏と表』	818	5	6.1	8	9.8	0	0.0	0	0.0
	『婚礼』	814	1	1.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	『夏』	1341	1	0.7	1	0.7	0	0.0	0	0.0
	『シーシュポスの神話』	2477	3	1.2	1	0.4	0	0.0	0	0.0
	『反抗する人間』	7196	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
政治評論	『ドイツ人の友への手紙』	492	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	『ギロチンに関する考察』	1138	4	3.5	0	0.0	1	0.9	0	0.0
	『時事評論集』	7381	5	0.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0
資料類	『ノート1』	2485	9	3.6	6	2.4	1	0.4	4	1.6
	『ノート2』 + 『旅日記』	5456	11	2.0	12	2.2	0	0.0	0	0.0
	『ノート3』	3535	8	2.3	16	4.5	0	0.0	1	0.3
	『初期作品集』	2160	7	3.2	12	5.6	1	0.5	2	0.9
	『キリスト教形而上学』	2071	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
合計・平均		60561	145	2.4	182	3.0	7	0.1	9	0.1

このように «maladie, malade» は合計で327例と、ある程度の頻度で用いられているが、«tuberculose, tuberculeux» の方は、合計で僅かに16例と、ほとんど有意のデータを形成していない。生前に発表された作品では皆無に近く、内的な世界をほぼそのまま反映できた「ノート」においてすらその数は少なく、特に『ノート2』では用例が0だというのは、この時期カミュが深刻な病状の再発に見舞われたことを考え合わせると極めて印象深い。そして、«maladie, malade»が頻用される『ペスト』においては、小説のテーマから言って当然ながら、ペストの暗喩として使われているケースが多いが、これを除くと、«maladie, malade» のうちかなりのものが、実際には «tuberculose,

tuberculeux」の陰喩として使用されているのである⁴⁶⁾。例えば、1937年8月～9月におけるフランス本国—イタリア旅行の際に、パリで「ノート」に書きつけた次の断章を見てみよう。

パリの路上で。こめかみで脈打つこの熱、世界と人々をなげうちたいという、奇妙な突然の感情。自らの肉体と戦うということ。ベンチに座り、風に吹かれ、内面からからっぽになり、うがたれて、僕はずっとK. マンスフィールドのことを考えていた。病いととの戦いについての優しくまた苦しみに満ちた話について考えていた。アルプスで僕を待ち受けているのは、自分が病いであるという意識なのだ。孤独の思いと、療養のためにそこに赴くのだという思いを込めて⁴⁷⁾。

こうした特徴的な単語の用法から指摘できるのは、「tuberculose, tuberculeux」という単語を書くことは極力避けようとするほど、この病気に対する恐怖、あるいは発病時に被ったトラウマは深かったということであろう。さらには、個別「結核」という病名ではなく、「病気一般」という表現を行うことで、人間に課せられた不条理な条件の象徴として捉えようという意志も働いていたのではないか、ということも考えられる。

発病から7～8年が経ち、さまざまな苦勞を重ねて、結核をてなずけながら生き続けること、いわば「病気との共生」にそれなりに慣れ親しんだカミュは、病いに関する哲学的省察をエッセイの中にちりばめるようになる。特にエッセイ集『婚礼』に収められた作品の中でも最も早く書き上げられたと考えられる「ジェミラの風」は、『裏と表』の全般に暗い色調と「ジェミラ」を除く『婚礼』の明るいトーンとをつなぐ過程的な作品と考えられるのだが⁴⁸⁾、ジェミラの廃虚で迎える夕暮れを前にしながら、作家は死と病いを巡る逆説的な考察を行うのである。

46) 確認されているかぎりのカミュの書簡においても、「tuberculose, tuberculeux」は用いられていない。資料的価値の極めて高い『カミュ—グルニエ往復書簡』においては、カミュは自分の病気について幾度も語っているが、常に「*ma maladie*」、*la maladie*」と述べられている。

47) *Carnets I*, pp.59-60. ゴチック強調（原文 *maladie*）および下線強調（原文 *être malade*）は、筆者。短編作家として名高いイギリスの女流小説家 Katherine Mansfield は、1923年に34歳で、肺結核のためにパリ郊外のフォンテーヌブローで死去した。カミュは、この断章を書いた8月にパリに滞在していたという関係でマンスフィールドを想起したのであろう。なおカミュは「こめかみ *tempe*」の血管が脈打つという表現をよく用いており、特に『幸福な死』でそれが目立つ（4例）。『異邦人』でも1例が認められ、さらに最終章では「夜と大地と塩（つまり海）の匂いが僕のこめかみを爽やかにした」という描写がある。独特な個人的身体感覚を一般的な身体感覚のように思い込んで登場人物に反映させることは、多くの作家において見られる現象であるが、カミュにおける「こめかみ感覚」もその例であろう。この身体感覚が結核の病状に由来するものであることは、ほぼ確実と思われる。また、こめかみの下で脈打っていたということから、これは浅側頭動脈であり、その拡張は一般に頭痛の原因となっている。

48) 『婚礼』の形成過程と「ジェミラの風」の特殊性に関しては、『異邦人』への道(5) — 妄執としてのテーマ 3 幸福の探求—下』『人文社会論叢』第6号, pp.35-42を参照

[...] この希望と光との終末を前にして、僕が確信を抱いていたのは、人生の終わりに、人間の名に値する人々が、このさしむかいを再び見出すはずだということ、自分たちのものであったさまざまな観念を捨て、運命を前にした古代人の視線の中で輝いている無垢と真実とを再び獲得するに違いない、ということだった。そうした人々は若さを取り戻す。だがそれは、死を抱きしめながらなのだ。この点で、病いほど惨めなものはない。それは死に対する治療薬なのだ。死を準備するのだ。病いは修業期間を作り出し、その第一期間は、自らを慰めるということだ。病いは、まったく死を迎えるという確信から逃れようとするたいへんな努力において、人間を支えるのだ。⁴⁹⁾

ここで病い «maladie» は、長期的な療養を必要とする病気という意味で作者の結核体験を前提としているが、そこから、死の可能性をもたらす長期の病い全般の比喻へと転化する。そして、死との差し向いから引きだしたカミュ的逆説「死そのものは忌むべきものかもしれないが、死を直面することを通じて生の最後が光り輝く」が提示され⁵⁰⁾、死に慣れさせ死を前にした緊張感をたわめてしまうからこそ病気は悲惨なのであるという、次なるカミュ的逆説が語られている⁵¹⁾。

このような形で、カミュにおいては «maladie, malade» という語彙に個人的なニュアンスが深く刻まれてしまったため、【表6-5】で明らかのように、『反抗する人間』や『時事評論集』のような政治的色彩の強いテキストにはほとんど使用されることがなかったのである。なお、フランス語の形容詞 «malade» が常に「病気」という内容で用いられるわけではなく、日常会話においては、例えば単に「具合（体調）が悪い」という意味で «Je suis malade.» などと言われることが多い。しかし、カミュ・テキストにおいては、このように軽い意味合いで形容詞 «malade» が使用されているケースはほとんどなく、「malade」は重い意味を担って使われ続けたのであった。

「結核」や「病気」を巡る使用語彙のカミュ・テキストにおけるこうした特徴を踏まえると、『転落』において「判事にして改悛者」クラマンズに次のように語らせているのを読む時、この小説が作者にとってどれほど自虐的な側面も備えていたかが見て取れるだろう。

もう感動なんてない！その日の気分があるだけで、というよりも、気分なんてものも全然ない。

49) 「エッセイ篇」, p.64. ただし、明確に「病いmaladie」という名詞形で示されているのはゴシックにした1箇所のみであり、他の部分では代名詞Elleで示されている。

50) 『異邦人』のムルソーが後に体現することになるモラルの原形である。

51) この逆説は、後の『シーシュポスの神話』に引き継がれ、ここでは「死」に不条理が、「病い」に永世への希望や形而上的な逃避が置き換えられて、不条理から目をそらさないことこそが不条理に目覚めた人間のとるべき道だという逆説的モラルが語られている。また、後に注73, 74で詳しく見るように、十代から二十代にかけてのカミュがパスカルを仮想論敵と考えていたらしいことを踏まえると、この一節はパスカルの「病いの善用について」のパロディとも見なせるだろう。

結核に罹った肺は乾燥することで治りますがね、そのおかげで、その肺の幸運な持ち主は少しずつ呼吸が困難になっていくというわけ。わたしも同じ話で、回復しながらじわりと精神的に死にかけていたんですな。⁵²⁾

「結核に罹った肺」という表現は、カミュ全テキストの中で、なんとここ1ヶ所しか認められない。発病以来20年あまり、内的な省察を記した「ノート」にも、公的な作品にも、一度として記せなかった表現を、『転落』執筆中のカミュは、まさにおのれの胸からえぐり出すようにして、原稿に書きつけたのであった。

6-4-2. 病いの自画像

病者としての自己をカミュはどのように認識したか、その点について物語っている最も初期のテキストが、ムスタファ病院での入院生活を題材に1933年に書かれ、『初期作品集』に収められた短いエッセイ、「貧しい地区の病院」である。このエッセイはカミュの初期のテキストには珍しく三人称体で書かれ、彼が療養中の自分の姿を客観的に突き放し、「ワレ」ではなく“one of them”として描こうとしたという姿勢を窺わせる。また、テキスト中に「五月の朝」とあるので、1931年におけるカミュの入院の時期と一致する。

学校の引け時に子供たちがいちどきに表へ出てくるように、病人達の一団が結核療養室から出てきた。長椅子を後ろに引きずって、そのために歩みが滞りがちであった。彼らは醜く、痩せこけていた。笑いと咳で咽が詰まりそうになっていた。そしてこの一団が発する大きな物音が、朝のみずみずしい大気の中を上っていった。患者達は、道の、まだ濡れている砂の上に椅子を置き、丸くなって座った。また笑い声と、短い話し声と、咳が聞こえた。しばらくすると、突然みなが黙り込んだ。あるのはもう日差しだけだった。⁵³⁾

大部屋で療養生活を送る患者の間には、不思議な共同体意識が芽生える。彼らはたわいのないことを語り合い、不安を吹き払うかのように笑い声を上げ、そうして咳込む。暗い定めの中に、乾いた不思議な明るさが同居する光景である。このような中で語られた、患者仲間の猥雑な会話を、若きカミュは書き留める。それは同時に、彼が罹った病いの持つ独特な、ある種ネガティブとも言え

52) 原文を引用する。

Plus d'émotions! Une humeur égale, ou plutôt pas d'humeur du tout. **Les poumons tuberculeux** guérissent en se desséchant et asphyxient peu à peu leur heureux propriétaire. Ainsi de moi qui mourais paisiblement de ma guérison. (*La Chute*, Pl. I, 1530)

本文および引用文における強調は、筆者による。

53) 『初期作品集』 p.241.下線による強調は、筆者による。

る側面の描写でもある。性的な感受性が研ぎ澄まされる年頃であったカミュは、こうした会話を耳にしてどのような感慨を抱いたであろうか。

「それでよ、ジャン・ペレス、あいつはどうしてるんだい？」「ガス会社のペレスかい？死んじゃったよ。でもやつは、家に帰りがったのさ。かみさんがいるってわけだ。そのかみさんが、お馬さんのよ。病気のせいで、やつはあんなになっちゃったんだな。年がら年中、かみさんの上に乗っかってる。かみさんはいやがってたよ。でもやつときた日にゃ、手が付けられねえんだ。毎日、2回も、3回もだよ。そんなわけで、病人はこの世とおさらばしたんだな」⁵⁴⁾

そして、患者の一人がふと漏らすせりふが、逆説的なアフォリズムとなって、カミュにとってのこの病気の本質的なイメージを描き出すのである。「結核っていうのは、治ることが分かっているただ一つの病気なんだ。ただ治るためには、長い時間がかかる」。交通事故による不慮の死を迎えるまでの約30年間、カミュの病いは完治することなく、まさしくシーシュポスの岩のように、彼は自分に課せられた病者としての条件を運び続けたのである。

その30年近くの間、カミュは自らの病いと「つきあい方」を学んでいったし、常に悲観的な考えに捕らわれていたわけではない。だが、めきめきと知的な才能を発揮するようになっていただけではなく、サッカーチームのゴールキーパーとして活躍するスポーツ少年でもあり、これからの青春へ向けてさまざまな期待と意欲に燃えていた17歳の少年にとって、ある日突然病人であるという自覚とともに生きなければならないという運命を宣告されるというのは、どれほど奥深い絶望体験であっただろうか。「醜く、痩せこけていた」とイメージされたのは、なによりもカミュ自身の姿であった。彼が本来なるべきであった、あるいはなろうとしていた「美しく、逞しい」若者の姿は、もはや手が届かないように思われたことであろう。

結核療養中の自画像を、カミュは『幸福な死』の中にも描き込んでいる。メルソーの行きつけのピストロの主人セレストにはルネという息子がいたが、結核を患っていたのだ⁵⁵⁾。第一部第2章でエマニュエルとメルソーが昼食を食べに行くと、ルネは片隅で卵を食べている。エマニュエルは、「気の毒に、あの子は胸を病んでいるんだ」という。ルネはそれほど痩せてはおらず、目も輝いてい

54) 同上、p.242。カミュがお気に入りの「ペレス」という名前（『幸福な死』における漁師、『異邦人』におけるメルソーの隣人、「ミノタウロスあるいはオランの憩い」に登場するボクサー）という名前が初めて現われるのもこのテキストである。もしペレスという名前に注目したのが入院中のことであるとしたら、それをを用いるたびに、古い記憶も蘇っていたことであろう。

55) このセレストは、当然、『異邦人』のセレストにそのまま受け継がれていく。また、セレストの子供が結核の療養をしているというシチュエーションと、肉屋のギュスターヴ・アコー叔父のところで少年カミュが療養していたシチュエーションが類似していることと、ロットマンが伝えるアコーの人間像とセレストのイメージの共通性を考えると、セレストのモデルは、かなりの部分ギュスターヴ・アコーだと思われる。

るが⁵⁶⁾、「たいていはまじめくさって黙りこくっていた」。客の一人が、「貧しい地区の病院」のせりふと同じように、「時間をかけ、用心を怠らなければ治るんだよ」とルネに言い聞かす⁵⁷⁾。第二部第4章でシュヌアに引きこもったメルソーが久しぶりにアルジェを訪れ、セレストの店に立ち寄ったときも、ルネは「相変わらず結核を病み、重々しい様子でいた」。ルネの存在は『幸福な死』の展開の上でほとんど意味を持たないエピソードに過ぎないが、『幸福な死』は、当初のプランではかなり自伝的な要素の強い小説となるはずだったのが、「幸福の探求とその帰結としての充足した死」というテーマにずれていったために、自伝的な要素が薄められていった、その名残りとしてカミュは盛り込みたかったのであろう⁵⁸⁾。

こうした自画像は、恩師ジャン・グルニエが、亡き愛弟子を偲んで執筆した『アルベール・カミュ回想』の中で、初めて会ったときのカミュのことを記している文章とぴったり重なっているだろう。カミュが通っていた高等学校、グラン・リセ（別名リセ・ピュジョー）の哲学クラスの教師としてグルニエがアルジェに赴任したのは1930年、その年の末に病いに倒れたカミュは、教室に姿を現わさなくなる。それまでカミュのことはそれほど意識していなかったグルニエは、長期欠席の生徒のことが気になり、結核を療養中だと知ると、クラスメートの一人に案内をさせて、カミュの自宅を訪問した。

部屋に入ると、アルベール・カミュは椅子に座っていた。そして、私にやっと「こんにちは」と言うだけで、健康状態に関して質問しても、単語をぼつぼつ並べて答えるだけであった。私と、同行したクラスメートは、アルベールを困らせているだけの様な感じであった。ことばとことばの間に、沈黙が割って入った。距離を置いて見ると、私は、上訴が却下されたと死刑囚の元に告げに来た検事のような様子をしていただろう。⁵⁹⁾

ここで、グルニエが自らを検事に擬している点が興味深い。むしろ「距離を置いてみると à distance」とあるように、この比喩の前提として、『異邦人』や『ペスト』を初めとするカミュの作品に濃厚な、裁判制度や検事に対する象徴的なこだわりや死刑囚のイメージの重要性をグルニエは踏まえている。しかしそのようなフィルターを通して数十年前を思い起こすと、闘病中の少年カミュの姿は確かに、「上訴が却下されたと検事から告げられた死刑囚」のように思われる重々しさを備えていたのであった。

56) 「貧しい地区の病院」の頃に比べると自己イメージがかなりポジティブに変わっている。

57) この後の場面でやはり、「貧しい地区の病院」で書き留められた、上記のジャン・ペレスに関わる会話がそのままの形で引用されている。

58) 1937年8月に記された当初のプランでは（「ノート」1-1、第118断章）、第一部の過去形で語られるB系列の2として、以下のようなメモが記されている。

Ch. B2 — Maladie de Patrice. Le docteur. « Cette extrême pointe... » (Carnets I, p.65)

59) Jean Grenier, *Albert Camus — souvenir*, Gallimard, 1968, p.10 (参照した版は、1987年のもの)

6-4-3. 病いの表現

6-4-1でも述べたように、「結核」という語彙自体をできるだけ避けようとした（避けてしまった）カミュにおいては、その症状に関する描写や、それに着想を得た表現は、実際の作品の中では極めて限られている。6-4-1で見た幻の断片や、「貧しい地区の病院」など、10代から20代にかけてのテキストにおいて発病体験を生々の形で書き留めようとしたのは当然の衝動であるが、早くも『幸福な死』の構想と執筆において、1937年7月頃の着想ではかなりの位置を占めていた病いのモチーフは、6-4-2で指摘したようにルネにまつわる挿話にその残滓をとどめるだけに縮小されてしまう。後年『異邦人』を自ら評して「客観性と超脱のための鍛練 *exercice d'objectivité et de détachement*」と述べたように⁶⁰⁾、カミュの作品執筆活動は、「内的世界を直接語りたいという衝動と、それに客観的な形式を与えようという自己規律」との絶え間のない相克であった。その結果として、結核体験は直接小説のモチーフとなることはなく、『ペスト』のように暗喩という形で表現されるしかなかったのである⁶¹⁾。

草稿であるがゆえに冒頭部分を除いてはほぼ自伝的なエピソードを書き連ねていた遺稿『最初の人間』でも、早すぎた事故死を考えるならば象徴的な符合にも思えてしまうが、主人公ジャック・コルムリイが病いに倒れるその直前で原稿が途切れていて、作者の結核体験に小説的描写が行われずに終わってしまった。こうした中で、『幸福な死』の最終章で、呼吸器を冒されたメルソーがそれにも関わらず夜の海で泳ぎ⁶²⁾、高熱を出して死んでいくシーンが、胸を病んだ描写が最も直接的に語られているテキストであろう。このシーンについては、この第6部の最終節で詳しく見るが、『幸福な死』が作者の生前未刊に終わったがゆえに、やはり埋もれたテキストだったのである。したがって、累々とペスト患者が横たわる『ペスト』において肺ペストの症状で死んでいく患者の描写が、生前に刊行されたものとしては、病床体験が直接のヒントとなった数少ないテキストの代表という

60) サルトルが主宰する『現代』 *Temps modernes* 誌は、1952年の5月号に、サルトルの愛弟子フランシス・ジャンソンがカミュの『反抗する人間』を一方的に論難した評論を掲載する。それに対してカミュが行った反論（『現代』1952年8月号に掲載）の中で用いられたのがこの表現であり、このテキストはその後『時事評論集2』に収められた。プレイヤッド版『エッセイ篇』p.758を参照（1977年版）。なお、その後の現代史が証明したように、この「論争」においては、国家テロを非難し続けたカミュの方に永続的な真理があり、サルトル一派の強弁は、現在から見れば戯画にすぎない。だが、論争の段取りや巧拙という点では、カミュの方が見劣りがしていたのは確かである。

61) 小説『ペスト』において「ペスト」が意味するものは、小説の内的論理から言ってさまざまに多様な解釈が可能になるが、『ペスト』が1941年次の着想から第二次世界大戦をくぐり抜けて完成稿に至ったという特殊事情から、さらに解釈は複雑となる。カミュ自身は、ロラン・バルトの『ペスト』評に反論して、「『ペスト』が対独抵抗運動の暗喩であることは明らかだ」つまり、作中のペストは政治的軍事的暴虐の暗喩であると、割り切りすぎた言明を1955年に行っているが（プレイヤッド版『演劇・小説篇』の注解で資料として引用されている）、こうした単純化の原因となったのは、当時の厳しい時代背景であろう。作家個人にとっての『ペスト』の着想の由来という点で資料を分析するならば、「ペスト」はやはり結核の暗喩という要素が強いのである。

62) 呼吸器の疾患であることは確かだが、「結核」とは一言も書かれていない。

ことになる。肺ペストと結核ではもちろん症状が異なるが、パヌルー神父がペストに倒れたときの次のような描写の迫真性は、胸の病いを抱えていた作家ならではのものと評してよいであろう。

パヌルー神父は、上掛けをはねのけては、また自分のほうへ引き寄せ、汗ばんだ額を絶えず手でこすり、たびたび身を起こしては、まるで咽から引きはがすような、かすれて湿った、締めつけられるような音を立てて、咳き込もうとするのであった。その時の様子は、まるで咽の奥に詰め込まれた脱脂綿を吐き出そうとしてそれができないかのようにであった。発作が終わると、全身をぐったりとさせて仰向けに倒れ込むのであった。⁶³⁾

しかしながら、目を小説テキストにのみ向けていては、カミュの表現衝動の全体像を見誤ることになる。1937年から着想し1939年に第1稿を完成させた『カリギュラ』は、戯曲としては第一作であるだけに、他の戯曲よりもカミュの肉声がよく聞こえるテキストである。この点については、本論文第3部で最初の妻シモーヌに裏切られた体験が直接『カリギュラ』第1稿に反映していることを論証したが⁶⁴⁾、それだけではなく、『カリギュラ』の中には、カミュの全テキストの中でも最も生々しく結核体験を反映した描写が盛り込まれているのである。『カリギュラ』第1稿において妹にして愛人ドリジュラを亡くし、愛が愛に報いず、死が愛に報いることがあると知って絶望のあまり逃走した皇帝カリギュラは、彼を必死で慰める年上の側女ケゾニアに対して、自分にとっての絶望の相貌を物語る。

では、口はきかずにおれのそばにいてくれ。たぶん、なんとかこれからきりぬけられると思う。だが、おれの中に、名前を持たぬ存在がいくつも沸きあがってくるのを感じるのだ。人間的ではない自由が持つ、あの恐るべき顔かたちのように。おれは少しもあらがうことができない。いいか。おれは、絶望することがあるとはわかっていた。けれども、絶望ということばの

63) 『ペスト』、「戯曲・小説篇」p.1407。

64) 『『異邦人』への道』第3部。

65) 『カイエ・アルベール・カミュ4』、p.32およびp.181（注）。ゴチック強調は筆者による。

66) 両者の異同を示すことにする。1939年稿にはあるが1943年稿では削除あるいは修正された部分をイタリックで示す（ト書きは省略）。1939年稿における描写の直接性が、1943年稿ではやや薄められている。

【1939年稿】

Alors reste près de moi sans parler. Je sortirai peut-être de là. Mais je sens monter en moi des êtres sans nom — comme les visages horribles d'une liberté inhumaine. Je ne puis plus rien contre eux, tu comprends. Je savais qu'on pouvait être désespéré. Mais je ne savais pas ce que ce mot voulait dire. Je croyais comme tout le monde que c'était une maladie de l'âme. Mais non, et c'est mon corps qui souffre. J'ai mal au cœur, Cæsonia. Non, n'approche pas. Laisse-moi. J'ai comme une envie de vomir dans tout le corps. Mes membres me font mal. Ma peau me fait mal. J'ai la tête creuse. Mais le plus terrible, c'est ce goût dans la bouche. Ce n'est pas du sang, ce n'est pas la mort, ni la fièvre. C'est tout ça en même temps. Il suffit que je remue la langue pour que tout redevienne noir et que les êtres me répugnent.

意味は知らなかったのだ。だれもと同じように、絶望は心の病いだと思っていた。そうではない。苦しんでいるのは俺の肉体なのだ。俺は気分が悪い、ケゾニア。いや、こっちへ来るな。ほっておいてくれ。体中で吐き気を覚えるような気がする。手足が痛い。皮膚が痛い。頭が張り裂けそうだ。いや、いちばん恐ろしいのは、口の中のこの味わいだ。血ではない。死でもない。その両方なのだ。俺が舌を動かささえしたら、なにもかも黒ずみ、人間どもはおれを毛嫌いするようになるのだ。⁶⁵⁾

シモーヌの裏切りから着想したエピソードは、本論文第3部で示したように、1943年のカリギュラ第3稿で大きく削られ、上演テキストでは痕跡をとどめるだけになってしまう。ところが、上記のテキストは、初演に用いられた1943年稿でもわずかな改変だけを施されるだけで受け継がれており⁶⁶⁾、今度は個別ドリジュラの死ではなく、「人は死ぬ、幸せではないのだ」という形而上学的な絶望にカリギュラが目覚めた、その描写として用いられることになるのである。「(この味わいは) 血ではない」とあえて作家は書きつけるが、この描写が、口中に溢れる咯血の血、吐き出すとともに凝固し黒ずんでいくその姿と、口の中になおも残る鉄錆のような味わいの記憶からもたらされたものであることは明らかだろう。このように結核の体験は、カミュの内面において、死のイメージだけではなく、死という人間の条件に対する苦悩そのもののイメージとして深化していったのである。

6-5. 反抗の起源

「反抗」la révolteは、カミュの人と作品を貫く根源的テーマの一つである。それは使用語彙のレベルでも明確な事実であり、①概念としての「反抗」la révolte、②行為者としての「反抗者」le révolté、③形容詞あるいは過去分詞形révolté、そして④動詞se révolterとその活用形など、反抗のテーマに関わる語彙を【表6-1】とほぼ同じコーパスにおいて検索すると⁶⁷⁾、【表6-6】のような出現数と出現率が得られるのである⁶⁸⁾。

【1943年稿】

Tu ne peux pas comprendre. Qu'importe ? Je sortirai peut-être de là. Mais je sens monter en moi des êtres sans nom. Que ferais-je contre eux ? Oh! Cæsonia, je savais qu'on pouvait être désespéré, mais j'ignorais ce que ce mot voulait dire. Je croyais comme tout le monde que c'était une maladie de l'âme. Mais non, c'est le corps qui souffre. Ma peau me fait mal, ma poitrine, mes membres. J'ai la tête creuse et le cœur soulevé. Et le plus affreux, c'est ce goût dans la bouche. Ni sang, ni mort, ni fièvre, mais tout cela à la fois. Il suffit que je remue la langue pour que tout redevienne noir et que les êtres me répugnent. Qu'il est dur, qu'il est amer de devenir un homme! (PL.I., p.26)

67) ノーベル賞受賞演説を収めた『スウェーデンでの講演』を追加した。

68) 名詞を直接修飾する過去分詞形révoltéと形容詞révoltéの区別は明確にはつきがたいので③としてまとめた。これに対して、il s'est révoltéのような場合は定動詞としての活用形なので④に区分した。また、révoltéは『反抗する人間』の章題・節題で5ヶ所、『時事評論集2』の章題・節題で7ヶ所用いられているが、これらは数値に含めていない。

作品のテーマから言って『反抗する人間』における用例が群を抜いているし、その着想・準備期間と重なる『ノート2』における用例も多い。ただし、「反抗」のテーマは『シーシュポスの神話』においてすでに重要なテーマとして現われ、『反抗する人間』における考察はその延長線上にあることに注意する必要がある（個人的な反抗から集団的・連帯的反抗へと展開したことが、両者の相違である）。また、小説や戯曲など、直接的な形でカミュが自己の思想を開陳することがほとんどなかったジャンルでは使用頻度は必然的に下がる。それに関わらず、「反抗」に関する語彙は早くも十代から二十代初めの『初期作品集』のテキストにおいて明確に出現し、ほぼ全生涯・全作品にわたって、満遍なく出現しているのである⁶⁹⁾。

【表 6-6】

ジャンル	作 品	行数	la révolte		le révolté		révolté		se révolter		合 計	
			出現数	出現率	出現数	出現率	出現数	出現率	出現数	出現率	出現数	出現率
小説	『幸福な死』	2439	7	2.9	0	0.0	0	0.0	0	0.0	7	2.9
	『異邦人』	1986	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	『ペスト』	5553	5	0.9	0	0.0	0	0.0	0	0.0	25	0.9
	『転落』	1996	1	0.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.5
	『追放と王国』	2885	1	0.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.3
	『最初の人間』	4712	2	0.4	0	0.0	1	0.2	0	0.0	3	0.6
戯曲	『カリギュラ』	891	1	1.1	0	0.0	0	0.0	1	1.1	2	2.2
	『誤解』	745	2	2.7	0	0.0	0	0.0	1	1.3	3	4.0
	『戒厳令』	1200	5	4.2	0	0.0	0	0.0	1	0.8	6	5.0
	『正義の人々』	790	2	2.5	1	1.3	0	0.0	0	0.0	3	3.8
エッセイ	『裏と表』	818	5	6.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0	5	6.1
	『婚礼』	814	7	8.6	0	0.0	0	0.0	0	0.0	7	8.6
	『夏』	1341	4	3.1	1	0.7	1	0.7	1	0.7	7	5.2
	『シーシュポスの神話』	2477	30	12.1	1	0.4	3	1.2	0	0.0	34	13.7
	『反抗する人間』	7196	418	58.8	100	13.9	46	6.4	19	2.6	583	81.0
	『スウェーデンでの講演』	561	3	3.5	0	0	1	1.8	0	0	4	7.1
政治評論	『ドイツ人の友への手紙』	492	1	2.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	2.0
	『ギロチンに関する考察』	1138	4	3.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	4	3.5
	『時事評論集』1,2,3	7381	42	6.6	5	0.7	32	4.3	2	0.3	81	11.0
資料類	『ノート1』	2485	11	4.4	0	0.0	0	0.0	0	0.0	11	4.4
	『ノート2』 + 『旅日記』	5456	9	14.5	4	0.7	16	2.9	2	0.4	101	18.5
	『ノート3』	3535	10	2.8	0	0.0	2	0.6	3	0.8	15	4.2
	『初期作品集』	2160	15	6.9	0	0.0	0	0.0	3	1.4	18	8.3
	『キリスト教形而上学』	2071	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	合計・平均	61122	655	10.7	112	1.8	102	1.7	33	0.5	902	14.8

カミュにおける反抗のテーマについて全面的に論じることは別稿に譲るとして、ここでは、そのテーマがカミュの内面で着想されたそもそもの契機として、発病体験と、それに由来する不断の死

69) この意味では、社会的儀礼と天上的救いに対する徹底した反抗者ムルソーを描き出した『異邦人』において「反抗」に関する語彙が皆無であるのは極めて印象的である。『異邦人』における極めて抑制された表現という事実が、ここでもまた例証される。他方、1950年代のテキストにおいては「反抗」に関する語彙が減少気味であるのは（『ノート3』など）、『反抗する人間』を巡るサルトル一派との応酬でカミュが精神的に被った傷の反映かもしれない。ここでは「エッセイ」の項目におさめたノーベル賞受賞講演では、その傷を振りきるかのように、「反抗」という語をキーワードとして用いているのであるが。

との差し向いが重要な働きをしたのに違いないことを示しておきたい。

17歳にして病いによる死の可能性という不条理な運命に直面させられた少年カミュは、その運命に対する態度決定を迫られた。先に引いた「裏と表のための断片」で描かれた「医者は暗にもう見込みはないと告げた *«le docteur le condamnait implicitement»*」という事実は、『異邦人』において判事がムルソーに死刑を宣告 *comdamner* するのに等しく、少年カミュを、独房におけるムルソーのように、死との差し向いに追い込んだのである。カミュは死の運命に屈することなく、それにあらがい続けることを選ぶ。それは死刑執行間際のムルソーがそうであったように、また、後年『シーシュポスの神話』において「より多く生きる」という〈量のモラル〉として展開される考え方のように、1分でも1秒でも、この地上における生を味わいつくし、十全に生き抜こうという心的態度の形成であった。

その一方、ムルソーの独房に現われた司祭が永世への希望を説くのと同様、アルジェリアとは言えカミュが暮らしていたフランス人社会では当然ながら共通の風土であったキリスト教による精神的救いの可能性が、少年カミュの元を訪れることになる。しかしながら何の咎もなかった少年カミュが病魔に冒されるという理屈に合わない世界を作った神に、その病魔に苦しむ彼がどうしても許さなくてはならないのか。また、宗教的教えに従って来世の第二の生に「希望」を託することをしてしまえば、彼のこの現世における生の意味も、さらには苦しみの意味さえもが無と化してしまう。それは、カミュにはとうてい受け入れがたい「精神的自殺」であった。

このようにして、結核体験を精神的に乗り越えるためにカミュが選んだ戦いの対象は、死の運命と宗教的救いという、一見相反するように見えるが彼にとっては同根である、ヤヌスの二重の相貌を帯びることになる。そして、このヤヌスに対する戦いの心的姿勢のことを、カミュは次第に「反抗 *la révolte*」と呼ぶようになるのである。

『初期作品集』に収められた、ごく初期の十代のテキストや、リセの課題として提出した小論文などにおいて早くも、*«la révolte»* をこうした意味合いで用いるようになるその萌芽が認められるのは、一つの驚きであろう。

ヴェルレーヌについて論じた文章で、この「呪われた詩人」をカミュは次のように称揚する。

①僕がヴェルレーヌを好まずにいられないのは、彼の欠陥と弱さゆえなのだ。かくも人間的な弱さゆえに、この繊細にして傷つけられた詩人は、我々と同様の、卑屈な行いと反抗の行いを行った存在になるのだ。つまり、魂において神に祈ったが、精神において神に対する罪を犯した人間である (pp.135-136)⁷⁰⁾

70) 以下、ページ数は、『カイエ・アルベール・カミュ 2—初期作品集—』(Gallimard, 1973) からのものである。また、ゴチックによる強調は筆者による。

いかにもフランス的な二項対立の論理を、その後作家となったカミュは巧みに使い続けるが、ここでは「神に祈る *prier Dieu*」は「卑屈な行い *ses lâchetés*」と形容され、これに対置された「反抗の行い *ses révoltes*」とは、「精神において神に対する罪を犯す *pécher avec son cerveau*」なのだというのが、十代のカミュの見解であった。Pécherという通常のフランス語の文脈ではネガティブな意味でしか用いられない語が強引に転用され、ここで早くも、「神に対する反抗」というテーマが顔を覗かせている。

②僕が自分の知性を忘却することができるのは、自分自身であることにおいてだけだ。だから、どうして分析する必要があるあるだろう？ どうして反抗する必要があるだろう？ 生きることは、充分な**反抗**ではないだろうか？ (p.182)

本論文題5部で詳しく分析したアフォリズム「錯乱」における、「狂人」のことばである⁷¹⁾。「生きること自体が反抗である」というテーゼは、その後のカミュの作品を貫いて流れる通奏低音となっていくことに注意したい。ただし、カミュの言う「生きること」は、単なる生物的存在あるいは社会的存在としての生存ではなく、一種求道的な条件が常につきまとう。『幸福な死』では幸福の探求のために生きることが示され、『異邦人』においては社会的な妥協を行わずに自己に忠実に生きる姿が描かれ、『シーシュポスの神話』においては「より多く生きること」が説かれる。

③この女は死んだ。死んだのだ。叫ばなくては。だれかを呼び、なぐりつけなくては。そうだ、僕は叫ぶ権利がある。**反抗する**権利がある。僕のこの女が殺されたからだ。僕が殺されたからだ。この女を愛していたのに。(p.228)

「死んだ女を前にして」という幻想的なテキストの一節である。「死んだ女」というイメージがどこから生じたのかは不明だが⁷²⁾、「死に対して抵抗すること」が「反抗する *se révolter*」という表現で示されている。

④人生を受け入れ、あるがままでそれを引き受けるのか？ ばかばかしい。それ以外の方法はあ
るだろうか？ 人生をあるがまま引き受ける必要などあるわけがない。人生が僕らを奪い去るの

71) 『異邦人』への道(4) 一妄執としてのテーマ3 幸福の探求一上 『人文社会論叢』第6号, pp.20-22を参照。

72) 『カリギュラ』1939年稿における、ドリジュラの死に遭遇した後のカリギュラの悲嘆とこのテキストを読み比べると、さらに、「死んだ女を前にして」を書いた当時カミュは既にスエトニウスの『十二皇帝伝』を呼んでいたことを考え合わせると、悲嘆にくれるカリギュラのイメージを既にこの頃から抱いていたのではないかという推測も成り立つ。

だ。そして時として僕らの道を閉ざすのだ。

人間の条件を受け入れるのか？ 僕は逆に、**反抗**が人間の本質の中にあると思う。

芝居。まねごと。誠実でなければならぬ。なんとしてでも誠実に、僕らに背いたとしても。

それに、**反抗**でも**絶望**でもないのだ。人生が備えているものとともにある人生だ。受け入れるか**反抗**するか、それは人生と直面することだ。

「矛盾」と題された僅か1ページのテキストの最初の部分である。何かのエッセイに用いようとしたのか、アフォリズムなのか、それとも日記に等しい内的な省察なのか、区別は難しい。またその論理自体も「矛盾」しており、当時のカミュの思考を明確に追うのは困難であるが、ここから抽出できるのはまず、人生の条件として与えられたものをそのまま認めることはせず、その条件にあらがいつつ生きるという、「生きる中での反抗」というテーゼであろう。その一方、「人間の条件 la condition humaine」や「人間の本質 la nature humaine」という表現が明らかにパスカルを踏まえていることと、パスカルの言う「人間の条件」が「人はみな、鎖に繋がれた死刑囚と同じく、死を免れないという条件にある」ということから⁷³⁾、そうした条件に反抗するというのは「死に対する反抗」にほかならないことになる⁷⁴⁾。

闘病を契機として早くも十代の頃から形成された「反抗」の姿勢は、やがてカミュの生涯を貫く心的思想的構造そのものと化し、「結核体験との戦い」という出発点から大きく展開して、この世界の不条理とその不条理を正当化しようとするあらゆる言説への反抗、という形をとっていくのである。『幸福な死』において幸福の探求を妨げている物質的不如意への戦いというかなり卑近な形態をとったメルソーの反抗は、『異邦人』においては不合理な社会的コードと宗教的救いへの反抗という姿で飛躍を遂げ、最終章における司祭に対する激越な叫び声において一つの頂点を極める。

73) 「人間の条件」については、マルローにもインスピレーションを与えた『パンセ』の有名な一節がある。«Qu'on s' imagine un nombre d' hommes dans les chaînes, et tous condamnés à mort, dont les uns étant chaque jour égorgés à la vue des autres, ceux qui restent voient leur propre condition dans celle de leurs semblables, et se regardant les uns et les autres avec douleur et sans espérance, attendent à leur tour. C'est l' image de la condition des hommes.» (ブランシュヴィック版Ⅲ-199, ラフユマ版Ⅸ-314)。

また、「人間の本質 la nature de l' homme」については、『パンセ』では単に«la nature» とのみ表わされることも多いが(これを「自然」と誤って解釈する論者もいる)、神により樂園から追放されたがゆえに人間の本質は墮落した«corrompu» ものであるというパスカルのテーゼは、若きカミュにはとても受け入れられるものではなかっただろう。

74) 多くのフランスの少年と同じく、リセの哲学の授業を通じてカミュは『パンセ』の読書を始めたのであろう。生涯を通じてカミュはパスカルに対して敬意は払っていたと思われるが(テキストに現われるのは形容詞 pascalien を含めて30箇所程度にすぎないが)、人間の条件と死への抵抗について思索を巡らせていた少年カミュにとって、パスカルは自らの反抗の論理を組み立てるための仮想論敵だったのではなかろうか。

俺は、手は空っぽでなにも持っていないように見えるだろう。でも俺は自分に確信を持ち、全てに確信を持っている。司祭などよりこの確信は強いのだ。俺の人生に確信を持ち、迫り来るこの死について確信を持っているのだ。そうだ、俺にはそれしかないとも。だが少なくとも、俺はこの真実を握っている。この真実が俺を握っているのと同じく。俺は正しかったし、今でも正しく、いつだって正しいのだ。俺はこんなふうに生きた。べつな風に生きることができたかもしれない。俺はこれを行い、あれを行わなかった。あのことは行わなかったけれど、別なことを行った。それから？ [...] 他人の死がなんだというのだ。母親の愛がなんだというのだ。司祭の神がなんだというのだ。人生を選ぼうが、運命を選び取ろうが、なんだというのだ。ただ一つの定めが俺を選ぶはずだからだ。そして俺とともに、何百万もの特権ある連中を選ぶからだ。その連中も、司祭と同じく、俺を兄弟と呼ぶのだ。司祭には分かっているのか。だれもが（唯一絶対の人生を送るという意味で）特権を得ているのだ。特権を得た人間しかいないのだ。⁷⁵⁾

() 内は、筆者による補いであるが、ここでの「特権を得ている *privilégé*」の意味は、このように解釈しないと意味が通らない。この部分を含むムルソーの最後の叫び声全般の理解も、批評家によっては混乱しているように思われる。特にカトリックの偏見によって目を曇らされたフランスの批評家にその傾向が強い。カミュにおける反抗の起源とその思想的発展の流れの中で追うならば、ムルソーの叫び声は、死刑という終着点まで含めて、1回限りのこの人生を全体として肯定し、そこからの逃避を求めないというモラルの表明と理解される。カミュにおける「死への反抗」は、死からの逃避ではなく、死そのものを見つめつつ最後までこの唯一の生を生き抜くというテーゼとして表明され、『異邦人』に続く『シーシュポスの神話』において、それゆえに肉体的な自殺も（永世の希望にすぎるといふ）思想的な自殺も拒否するという命題に発展していくのである。

作家自身が「不条理のサイクル」と名付けた1940年代初頭までの作品においては、反抗のテーマは、第5部で見た幸福のテーマと同様、このように個人的なモラルとして展開されていた。だが第二次世界大戦の勃発とドイツ軍によるフランス占領、および占領下の抵抗体験を通じて、カミュにおける反抗の対象は、個人に課せられる自然的な不条理から、集団に課せられるやはり人間集団に起因する社会的・政治的不条理へと劇的な転換を遂げる。そして、冷戦下の厳しい状況下で著された『反抗する人間』における反抗の対象は、大量殺人や国家テロを正当化する、「人類を救う」と称するあらゆる政治的言説となるのであった。

とはいえ、サルトルら政治的知識人一派と反抗者カミュを根源的に分かちるのは、前者が論理的なテーゼをあらかじめ定め、それによって集団および個人の取るべき行動を規定しようとしたのに対

75) 『異邦人』、「戯曲・小説篇」 pp.1210-11.

し⁷⁶⁾、カミュが、徹頭徹尾自己の個人的なモラルにこだわりつつ、そのモラルが他者や集団の幸福と重なり合う限りにおいて、それを他者や集団と共有していこうとしていた点である。この姿勢は、『ペスト』に描かれた戦う人々の姿、とりわけ新聞記者ランベールの人間的成長の中に克明に反映していると言えるであろう。『反抗する人間』のうたい文句として書かれた、デカルトをもじったいかにも不器用な一文「われ反抗す、ゆえにわれら在り」も⁷⁷⁾、カミュの反抗が常に個人を、つまり一個の生身の人間を出発点としていることの表明なのであった。これが、政治的な意味では確かにカミュの思想的限界をもたらした。だが、これゆえにこそ、当時のフランスにおける多くの知識人とは異なり、カミュは集団のために個人を犠牲にし、目的のために手段を正当化するような言説に陥らずに済んだのである。自らが犠牲になることを認められない以上、他者が犠牲になることを正当化することなど、できようはずもないのであるから⁷⁸⁾。

それゆえ、『ペスト』という、集団に課される不条理に対する抵抗を描いた作品においても、カミュを反抗の論理へと駆り立てたその原初のイメージが反復されるのである。ペストの流行が始まってから半年ほどした10月の末、疫病の勢いが一向に衰える気配を見せぬ中、リウーら医師団は、カステルが開発した新しい血清を、予審判事オトンの一人息子に投与することにする⁷⁹⁾。この血清が功を奏さなければ、医師団はもはやペストとの戦いにおいて打つ手はなくなってしまうと考えられていた。この子供が被験者となったのは、回復の見込みがないからであり、言わば一種の人体実験であった。リウー、カステルだけではなく、タルー、ランベール、グラン、パヌルー神父ら、『ペスト』の主立った人物が子供の病床に駆けつける。膨大なペストの犠牲者と向き合ってきた彼らが子供の最期に立ちあうのはむろん初めてのことではなかったが、血清の効果を確かめるためにその苦しみの一つ一つを観察しなければならなかったがゆえに、オトン判事の息子の断末魔は、リウーたちにとって心をかきむしる光景であった。血清の投与もむなしく、ただ苦しみを長引かせるだけの結果となって、その子供は息を引き取る。

76) サルトルの言う「自由」の論理や「アンガージュマン」のモラルは、本質的に観念的なものであり、その観念が許すかぎりにおいて、民族解放闘争を支持しつつ、同時にスターリンのソビエトすら擁護していたのであった。

77) «je me révolte, donc nous sommes». 『反抗する人間』第1部「『反抗する人間』」の末尾にある。「エッセイ篇」p.432.

78) 他に取るべき政治的手段がないがゆえにテロリズムに走る集団が横行する一方、「テロとの戦い」と称してより悪辣な国家テロを繰り広げる国家が幅を利かすこの21世紀の初頭、テロリズムも国家テロも否定しえたカミュの政治的思想はもっと見直されるべきであろう。『正義の人々』に描かれたモラルこそは、無辜の市民を犠牲にするテロリズムに対する最大にして本質的な武器である。そして、もし現在カミュが存命中だったとしたら、現代アメリカにおける真の知識人の一人チョムスキーと並んで、「悪の帝国」アメリカ合州国の政治的罪を暴く論陣を繰り広げたであろうに。

79) フィリップという名であるが、「un petit garçon」と形容されているので、10歳以下の男の子であろう。

子供の腕が持ち上がり、膝の辺りの上掛けをかきむしり、そして突然、子供は脚を折り曲げ、腿をおなかの近くまで引きつけると、硬直した。そうして、はじめて目を開き、目の前にいるリウーの顔を見つめた。今や灰色の粘土のように固まったその顔のくぼみで、口が開き、そしてほとんど同時に、ただ一筋の叫び声が発せられ、発せられ続け、呼吸によってかろうじて強弱がつくものの、突如として病室を、単調な、不調和な、人間のものとはほとんど思えぬがゆえに万人が同時に叫んでいるような、抗議の音で満たしたのであった。リウーは歯を食いしばった。タルーは目を背けた。[...] 医師 [リウー] がその時気づいたのは、子供の叫び声が弱まったこと、弱まり続けていること、そしてまさに止まったということだった。彼の周囲で、嘆き声が再び聞かれた。だがそれは低く、たった今終わったばかりのこの戦いの遠いこだまのような音であった。なぜなら、戦いは終わったからだ。カステルがベッドの反対側からやってきて、これで終いだと言った。口を開き、しかし口はきかず、子供は、しわくちゃになった寝具の真ん中に横たわっていた。突如として小さくなり、顔に涙の跡を残したまま。⁸⁰⁾

子供の断末魔の叫び声は、ただの苦痛の声ではなく、「抗議の叫び *une protestation*」と形容される。それは、なんの咎もない子供に死を課す不条理な運命に対する抗議であると同時に、そのように世界を創造した造物主への抗議の声なのであった。この抗議の声は、『ペスト』執筆時から十数年を遡り、断末魔を免れはしたものの死との差し向いを強いられた少年カミュの抗議の声と、その水脈において通じ合うのではないか。だからこそ医師リウーもまた、この場面の直後、かつて「ペストは不信心な人間に下された神の試練だ」と説教を行って不条理を正当化しようとした神父パヌルーに対して、「ああ、少なくともあの子は、無垢だった。あなたもご存知のはずだ！」と、怒りと抗議の声を上げるのである。そして「おそらく、私たちは理解できないことも愛さなくてはならないのです」とつぶやく神父に対して次のように言明する。

「いいえ、神父さん、僕は愛についてあなたとは違った考えを持っています。そして、子供がさいなまれるようなこの世界の創造のされかたを愛することなど、死んでもできません」⁸¹⁾

発病したときの少年カミュもまた、「無垢な自分が死を課されるようなこの世界の創造のされかた *«la création»* など断じて認められない」と深く心に刻んだことであろう。もがき苦しんだあげくベッドの中で小さく縮こまって冷たくなった子供の姿は、ありえたかもしれない少年カミュの姿であ

80) 『ペスト』第4部。「戯曲・小説篇」pp.1395-96.

81) « Non, mon père, dit-il. Je me fais une autre idée de l'amour. Et je refuserai jusqu'à la mort d'aimer cette création où des enfants sont torturés. » PL.I, pp.1397.

った。発病から十数年を経て、少年カミュの心の叫びは、『ペスト』における英雄的な医師の姿を通じて、ようやく全的な表現の場を得たことになるのではないか。このようにして、カミュは自らの発病体験から「反抗la révolte」という生涯にわたる本質的なテーマを引きだしたと同時に、その原点を頑なに守り続けようとしたのである。

(第6節以下、次号)